

第三十六 國文叢話(三十六件)

文學博士 物 集 高 見

國文を習ふ人の心得べき事ども

國文を習ふ人の、まづ習ふべきは、五十音、片假字、平假字、送假字、假字遣、互爾乎波をはじめ、體言、用言などの、あるやう、また、その體言、用言などの、他の語どもと、互ひに連合する上についての事、または、面白しと思はるゝ、歌文、誤りにはあらじかと思はるゝ歌文など、すべては、國文の上の語遣どもなり、されば、今、この國文叢話の欄内には、何くれの次第は設けず、唯だ、その習ふべき事どもの、物にふれ、事につけて思ひいでらるゝ、がある毎に、つぎ／＼に書きいづべし、

第一 言語の増加せる有様、および、世々の言語の種類、および、時代語、

時文言など、

余、日本大辭林を著して、古今雅俗の語、おほよそ、六萬言許を集めたる事あり、その集めたる語どもをみるに、この數萬の語どもは、同時代に、同一時に發生せしにはあら

で、世々を経るまゝに、漸次に出來し、言語の追々に加はり添ひて、かゝる大數とはなりしなり、今、その辭林について、その語の時代をわたれば、神代語、奈良朝語、延暦遷都後の語、源平時代の語などの區別もあり、また、その時代々々の語の中にも、宮女の語、武人の語、僧侶の語、儒者の語、商人の語、農夫の語など、名づくべき者もあり、また、その時代の語の多少を較ぶれば、奈良朝語は、神代語よりも多く、延暦遷都後の語は、奈良朝語よりも多きが如く、後世に進むに、またがひて増加せる跡もみえて、面白く感ぜらるゝ事あり、さて、また、その代々を経て出來たる語に、眞の新語なると、舊語の轉訛したるとあり、さる事どもは、餘白のある時を待ちて、追々にいふべけれど、今、こゝに、舊語の轉訛したる一例をあげて、後にいふべき設けとすべし、今、諸人の、夏時の食料とする海藻に、トコロテンと呼ぶものあり、この物、ふるくは、コ、ロテイとも、コ、ロブトとも、コルモハとも呼べり、この物、糞とらかせば、よく疑る者なれば、コルモハと呼ぶはこの物の本名にて、モハとは、海藻、道理の上も、よく適ひて聞ゆるを、和名抄の頃には、十年より九百三十四いつしか、コ、ロブトと訛り、七十一番職人歌合の頃には、よ、今年の三百八十九十また、トコロテイとも訛り、今は、なべて、トコロテンとのみ呼べり、さる

に、燕石襟志には、またこの物を、コ、バロモとも呼べりといへれど、その證はみいせず、若し、その證をみいでは、コ、ロブトと呼びし時代の前後なるべし、されば、今、文章をかゝんとする人は、その書かんとする文章の時代と、同時代の言語を用ふるを佳とすべし、文章の脈は、中古にして、その語は太古なるなどはいかゞあらん、況して、一文章中に、太古、中古、近古の文脈をまじへ、あまつさへ、漢文脈、洋文脈をも雜へたるなどは、いふも更なり、されど、かゝる文章の、この文運隆盛の、今の御代にも、朝夕にみえしらがふは如何ぞや、

第二 過去をあらはす辭ども

數萬の言語の同時代に、一齊に出來しにはあらぬ事は、既に、前にもいへるが如くなるを、怪むべきは、作用言に添へて、過去の時をあらはす、き、つ、ぬ、け、り、た、り、の五辭なり、この五辭のみは、同時代に、一齊に發生せりとすべきか、過去をあらはす、且、彌、乎、波、も、時によりて、變る事あるは、現に、今は、上の五辭は、用ひずして、タの一辭を用ふるを思へば、今は、空、晴、れ、け、り、な、ど、と、は、言、は、す、古も、然かこそありけめ、さるに、或先生の教なり、といふを聞きしに、上句に、け、り、と、い、へ、る時は、下句には、辭を換へて、き、といふべし、

上節にぬといへる時は、下節には、同辭を避けて、たりといふべし、けりきぬたり、既に、前にある時は、つをもて、後を結ぶべしと教へたりといへり、こは昔年の事なれば、聞き僻めし事もあるべけれど、古先生達の文章にも、往々、さる心しらひのみゆるもあり、今も、同辭を避けよと教ふる人の、全く無しとも定むまじげなり、且つは、同辭を避くといふことも、修辭の上にて、大切の事なれば、それもわろきにはあらず、されど甲の辭には、甲の辭の意味あり、乙の辭には、乙の辭の意味ありて、自由に振り換ふべきにあらねば、同意味をいふに、同辭の重るは、道理に於ても避くべからぬ事ならん、然るに、それ避けよと教ふる人は、この五辭は、同意味の辭なりと思はるゝにや、また、この五辭の中の、つぬを區別して、つるぬるの辨といふ書を著したる先生あり、その先生の説に、つるは作用言の能動性につく者なり、ぬるは自動性につく者なりと論せられたるを、余も、猶いと若かりし程にて、さる事なりと思ひしは、まだしかりき、國文を習ふ若人達、余の覆轍を覆みたまふなかれ、

第三 鼻音の假字

鼻音の假字に用ふる、平假字のんと、片假字のンとは漢字の、いかなる文字より、採り

しかといふ人あり、古書どもには、さる鼻音の假字はなくて、今の鼻音に呼ぶ音は、牟爾などをもて書きたり、或先生は、んは、梵字の空點といふ者より採りて作れるなりといへり、梵字の空點とは、梵字に撥ぬる音を添ふる時、その字の頭に、・の如き記號を添ふる事あり、その記號を、空點とはいふなり、されど、この説いかゝあらん、片假字のンこそは、聊かは似たれど、平假字のんは、似つかはしからぬ様なり、されば、吾が徒は、んは無の草變にて、ンは、二の草變なりといは、まほしく覺ゆ、然るに、或説には、んも、にの末の點をはねたるならんともいへり、この説は、伴信友といふ人のかけるものにもみえたり、左にあぐべし、

顯昭の古今集注の説に、んといふ文字は、なきを、ひとへに、ニと、假字をつけんも、さすがにあしければ、外書には、はねる時には、ンと書き侍るなり、同じニ、文字なれども、下の點をはねて書くなり、また、同人の袖中抄に、縁の字の音の論に、えにとは、えんといふ語なり、末は、ねたる文字は、いづれも假字をば、にとつゝくるなり、はねたる假字の文字なき故なりなどいへり、これによれば、平假字のんをんと書き、片假字のニをンと書くも、ともに、下の點をはねたるなり云々、

また、んといふ文字は、古人は書かざりし由にて、これも、同じ人の書けるものにみえ

たれど、序に、本書より引くべし、鴨長明が無名抄に、古人の云ふ、かなに、ものかく事は云々、いづれもく、かまへて、眞字のことばをかゝじとするなり、心の及ぶかぎりはいかにもやはらげかきて、力なき所をば、眞字にてかく、それにとりては、ねたる文字、入聲の文字の書きにくきなどをば、みな捨てて書くなり、萬葉には、新羅をば、し。ら。とかけり、古今の序には、喜撰をば、き。せ。と書く、これらみな、その證なり、

第四 といふ互爾乎波

互爾乎波の、といふ辭の、切れたる語を承くる辭なる事は、本居先生の詞の玉緒にいはれたるが如し、然るに、猶、それあらじと諍ひて、何の書にはかくあり、吳の卷にはかくありといふ説の、折々に聞ゆるは、心憂き事なり、との切れたるを承くる辭なる事は、今更にいふべくはあらねど、上にいへる如く、諍ふ人の無きにもあらねば、その先生達の引證する詞どもにつきて、聊か辨ふべし、先生達の引證する詞どもをみるに、との切れぬを承けたるが如くみゆるは、その間に、名詞の省きたるがある所、或は、ぞ。なり。などいふべき辭の、省きたるがある所に限れり、かゝる所にあるとは、連體言を承けたるには、あらずして、この連體言など呼ぶ人あるは、先輩のつけたる名なるを、近來續體言など呼ぶ人あるは、如何ぞや、名は、物を區別する

記號なるに、區別せし跡はなくして、唯だ、その名のみを呼び換ふるは、人まどはしの事ならずや、殊に、それもその名のよからばこそあらめ、連體と續體の、その字面のいづれが連體言の次にあるべき、省かれたる語どもを承けたるのなり、されば、例へば、(伊呂波歌は、空海の作りしといふ説あり)とはいふべけれど、(空海は、四教法文によりて、伊呂波歌を作りしといふ)とはいふまじきなり、そは、前のは歌者などいふべき名詞を入れて聞くべき文脈なれど、次のは、入れずて聞くべき文脈なればなり、また、(方言は、如何して出来しといふに)とはいふべけれども、(方言昔よりありしといへど)とはいふまじきなり、そは、前のは、ぞ。を入れて聞くべき文脈なれど、次のは、入れずて聞くべき文脈なればなり、また、(この次は、誰が書きしかと問ふ故に、余が書きしと答へたり)とはいふべけれど、(余、古文を書きしといへども)とはいふまじきなり、そは、前のは、なり。を入れて聞くべき文脈なれど、次のは、入れずて聞くべき文脈なればなり、この區別は、先づ、名詞を入れて聞くべき文脈には、その句中に、上に、必ず、の文字あり、そのの文字は、下の名詞につく者なれば、そのの文字ある時は、下に名詞の省きてあるが知らるゝなり、また、ぞ。を入れて聞くべき文脈には、その句中に、上に、必ず、何、誰、幾、何時、何處、何方、如何などの疑辭あるか、或は、問答の文體なるか、或は、解釋の文體な

るかなり、但し、解釋の文體なるはその句中に、上には、文字のあるを見出づべし、古の名ある人の物したる書どもをみんなには、その心して、細やかに見るべし、その詞づかひの嚴格なるには、用意の程もしられて、驚かる、事あるべしかし、

第五 互爾乎波の一種のと、のへ、

互爾乎波の調へは、何ばかりの事にもあらねど、物識人も、時としては、誤る事の無きにしもあらねば、まして、初學の人は、思ひ惑ふ方もあるべし、今は、二十年許もあなたなりけん、或先生の、源語奥旨といふ書を物せりとて、余にも得させし事ありしに、みもてゆけば、夢にみえし上臈のみえずなりしをいふとて、いづちにか消えうせぬといへるをみて、この文詞は、今は、記憶のまいにかけるなれば、聊かは、如何ぞや思はれし事ありき、されど、今は、かゝる異やうなる詞づかひに習ふ人もあるまじければ、その事はいはず、また、或人、袋草紙にのせたる、好忠の、わがせこが袖しろたへの花のいろをこれなん梅と今日ぞしりぬるといふ歌の、なんとぞと重れる互爾乎波を論せし事ありて、この歌は、誤謬なし、なんとぞと重れるは、互爾乎波の調への上にて、許さぬ事はもとよりなれど、この歌の、なんは、梅ととあると、文字までに係りて、下のしり

ぬるには係らぬ故に、なんとぞと重る例をもては、咎むべからずといへり、或人は、斯道に勞ある人にて、世のかいなでの際にはあらねば、梅と、と、文字との間になるといふ語の隠れたる者として、なんはなるをもて結び、ぞは、ぬるをもて結びたれば、ぞ、なんは別々にて、重れるにはあらずと判斷せしなり、判斷の用意ゆきとゞきて、間然する所なし、但し、こは、余が語の足らざりしより起りし過失なり、余、さきに、或人に、互爾乎波の調へを語りて、互爾乎波の結びは、その係りのかゝる語なりといへり、されば、或人は、その余が説によりて、この歌を判斷して、その、なんとぞとの、係る語の同じからぬをもて、結びの別々なるを認めしなり、これ、余が語の足らざりし所なり、互爾乎波の結びは、その係りのかゝる語なるは、勿論なれども、例へば、前の歌の、なんとぞとの如く、係る語は、別々にありても、同一事にして、別々の事ならぬは、その結びは、最終の語にあるなり、然る時は、前の歌の結びは、しりぬるにして、しりぬるの一結辭に、なんとぞとの重れる者なれば、これ、誤謬なり、すべて、同一事にして、別々の事ならぬ時は、その中間に、結びに用ふべき語ありても、その語は、多くは、とにて、などを、もて承けて、最終の語に送りゆきて、結ぶものなり、次に、あぐる例どもをみて、悟るべし、

竹取物語の一節

この妻は、火にやかんに、焼けすばこ。そ、誠ならんと思ひて、人のいふ事にもま
けめ。

大和物語の一節

何のうちはかされたまふべきにもあらず、物をこそばたまはせんとすれ、なさ
なぎものなりといふ。

紫式部日記の一節

右宰相中将の、あるべきかぎりはみなしたり、ひすましのふとりも、のひた
るさまでとびたりと、人ほゝゑむなりし、

伊勢物語の一節

藤原のまさちかといふをなん、まらうどされにて、その日はあるじまうけし
たりける。

第六 詞づかひの大切なる (二)

詞づかひの等閑にすまじき事は、いふも更なれど、古書どもには、傳寫の誤りも多け
れば、初學のほどは、その誤りをもうくる事あるべし。湖月抄本の源氏物語は、殊に、人
の讀むものなれど、傳寫の誤りとおぼしきもすくなからねば、心すべき事なり。今は、

五六年も昔なりけん、伊勢物語をみし事のありしに、その初段に、(むかし男、うひかう
ぶりして、奈良の京、かすがの里に、しるよし、て、狩にいにけり、その里に、いとなまめ
いたる女は、らからすみけり、この男、かいまみてけり云々、男の著たりける狩衣のす
そをきりて、歌をかきてやる、その男、しのおすりの狩衣を、なん著たりける)とあるを
みて、如何ぞやありと思ひし事あり、そは、かくては、狩衣の裾をきりしも、歌を書きし
も、女のしわざなればなり、また、同書六段には、(むかし男ありけり云々、夜もふけにけ
れば、鬼ある所ともしらで、雷さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばら
くらに、女をば、おくにおしいれて、男、弓やなぐひを負いて、戸口にをり、はや、夜もあけ
なんと思ひつゝ、居たりけるに、鬼は、や、ひとくちにくひてけり、あなやといひけれど、
雷なるさわぎに、えきかざりけり)とあれど、かくては、鬼にくはれし人は、女にはあら
で、男にこそ聞ゆなるを、さては、また、前後の文意に適はぬをもて、心も得でありわた
りしに、その後、朱雀院の塗籠御本なりといふ一本をみしに、それには、(鬼は、や、女をば
ひとくちにくひてけり)とありしかば、普通本のは、例の傳寫の誤りにて、女をばの三
字を脱し、なりとしられたり、されば、鬼にも角にも、古書どもをみんには、何はあれ

ど、まづ、その本のよしあしを知るべきなり、

第七 雅言俗言の區別

語に雅言といひ俗言といふありて、雅言とは、正しくてみやびたるをいひ、俗言とは、訛りてさとびたるをいふ事なるを、何時の頃よりか、雅俗の區別おぼろげになりて、かの雅言集覽といふ書名なども、その凡例に、この書にいだしたる雅言どもは、延喜よりこのかた、歌にも、文にも用ひなれたる語どもなりといへるをみれば、今よりは、三四百年乃至八九百年あなただの語にて、歌文に用ふるものを集めたるよしの名なるべし、さるに、またその書に載せたる語どもの中には、へしぐちへろくやほろほろめかこうてへんはなうそやぐわぎつねわにようばうしれわらひかはかほうどきなどのむげに卑しけに聞ゆるもまじれるをみれば、この語どもも、今は昔となれるをもて、既に、雅言になれりとして採られしなるべし、されど、この時の古今をもて、語の雅俗をわかつといふはいかゞあらん、語の雅俗は、語にありて、時にはあるべくもあらねば、古言にも、俗言あるべく、今言にも、雅言あるべし、いかでかは、一向に、今は、昔になれるからといはん、雅言集覽の凡例の説を推しひろめていふ時は、今日の俚言

鄙言も、三四百年を経ば、雅言となるべき譯なれども、前にもいへるが如く、語の雅俗は、正しきと正しからぬとにてわかつ事なれば、雅言は、初より雅言にて、俗言は、終まで俗言なり、語は、器物と異なれば、年月と共に推し移りて、次第に、高雅に變はるべくはあらず、されば、初學の人の歌文を作らんには、時代によりて、雅言の資格を得たる者は撰ばずして、初より、雅言と思はる、者を撰ぶべし、雅言と思はるべき者は、語の訛らぬものなり、類れぬものなり、語根、正確にして、意義分明なるものなり、中世の一時の流行語、或は、古今の地方語などは、雅言にはあらぬなり、萬葉集の東歌の語は、千年以前の古言なれども、ちかく、物類稱呼に載せたと一般にて、與に、雅言にはあらぬなり、初學の人、既に、その雅言を撰ばば、また、その雅言の中について、適當なる者を撰ぶべし、與に、雅言なる者にも、文には書くべくして、歌には讀むまじきもあり、歌には讀むべくして、文には書くまじきもあり、父母かぞ、兄妹いろは、吾妹わぎも、吾夫子わがせこ、などは、歌には讀むべくして、文には書くまじきものなり、妻夫めをうと、妹いもうと、弟おとうと、などは、文には書くべくして、歌には讀むまじきものなり、されば、文語と歌語とを辨へての後、は、また、その文語、歌語の中について、優美なるを撰ぶべし、與に、雅言にして、與に文

語なる者にも、與に、雅言にして、歌語なる者にも、優美なると優美ならぬとあり、されど、この區別はその人の心のひく方にもよる事なれば、今はもたすべし。

第八 文章の巧拙及び古文と今文との比較

語の雅俗を判するに、その語の時代を用ふまじきは既に、前條に述べたるが如くなるを、猶いぶかしく思はるゝは、文章の巧拙をも、文語文脈の時代をもて判せんとする事なり、この事よ、今はしらす、十五六年前、某先生、余に語りて、文章のいたく、後世に降りて衰へたるを嘆きし事ありき、その時、余は曲亭馬琴が著したる皿々郷談をもて、落窪物語とくらべて、文章の優劣を判せしに、先生いはく、皿々郷談は、俗言なり、文語の野鄙なるはいふも更に、文脈のしどろなるは、太平記の道行文の如しもとより、同日に較べいふべきにはあらずと、事もなげにいはいれしを、本意なしとは思ひしかど、その時はさて止みたり、されど、余が、この比較は文語文脈の優劣を較べんとにはあらず、また辭格語法を較べんとにもあらず、唯だ、その作者の慘憺たる意匠と、その意匠を書きあらはしたる筆力との優劣を較べんとせしなり、文語文脈は、時代の變にて、後世

には、後世の文語文脈ある事、上古中古には、上古中古の文語文脈あるが如し、されば、文語文脈の時代をもて、文章の優劣は論すべきにあらず、また辭格語法の違へるは、直せば直る事なれば、假令文語は誤謬ありとも、文脈は道行文なりとも、それをもて、文章の優劣は論すべきにあらず、文章を論するには、文章を論する法あり、文語文脈をもて、文章を論せんとするは、衣裳の仕立をもて、その地合を論せんとするが如し、仕立と地合とは別々なり、錦衣は、その仕立はわろくとも、錦衣は錦衣なり、布衣は、その仕立はよくとも、布衣は布衣なり、仕立わろき錦衣は縫ひ直すべし、仕立よき布衣は縫ひ直すべからず、仕立わろきをもて、錦衣はすてず、仕立よきをもて、布衣は錦衣に銜ふべからず、されば、文章の巧拙を論せんに、は文語文脈の時代にもよらず、辭格語法の規則にもよらず、前にいはゆる、意匠のいたりいたらぬと、意匠を書きあらはす筆の慥かなると慥かならぬとによるべし、今、左に長徳、長保の頃に時めきし、清少納言のかけるものと、寛保、寶曆の頃に、きこえし、也有老人がかけけるものとをくらべて、後世の畏るべき所をしめし、來者の侮るまじきをしらしむ。

清少納言

虫は、すゝむし、松むしはたおり、きりぐす、てふ、われから、ひをむし、ほたる、みの
むしいとあはれなり、鬼のうみたりければ、おやに似て、これも、おそろしきこ、
ろあらんとて、親の、あやしききぬひきさせて、いま、秋風ふかんをりにぞこんず
る、またよといひて、逃げていにけるもしらず、風の音をき、しりて、八月ばかり
になれば、ちゝよくと、はかなげに鳴く、いみじくあはれなり、
ひぐらし、ぬかづきむし、またあはれなり、さる心に、道心おこして、つきありくら
んよ、また、おもひかけず、くらき所などに、ほとめきありきたるき、つけたるこ
そおかしけれ、
蠅こそ、にくきものうちに、いれつべけれ、あいぎやうなくにくきものは、ひと
びとしう書きいづべきもののやうにあらねど、よろづの物に、顔などに、ぬれ
たる脚して、居たるなどよ、人の名につきたるいとうとまし、
夏虫、いとおかしく、廊のうへとびあり、くいとおかし、
蟻はにくけれど、かるびいみじうて、水のうへなどを、たゞあゆみにあゆみあり
くこそおかしけれ、

鳥は、ことゝころのものなれど、鸚鵡いとあはれなり、人のいふらんことをまね
ぶらんよ、

郭公、水鶏、まぎ、みこどり、ひわ、ひたゝき、山鳥は、友をこひて、鳴くに、鏡をみせられ
ば、なぐさむらん、いとあはれなり、谷へだてたるほどなどいとこゝろぐるし、
鶴は、こちたきさまなれど、なくこそ、雲居まできこゆらん、いとめでたし、
頭あかきすゝめ、いかるがのをどり、たくみどり、鷺は、いとみるめもみぐるし、ま
なこゐなども、うたて、よろづになつかしからねど、ゆるぎの森に、ひとりあはれ
とあらそふらんこそおかしけれ、

箱鳥、水鳥は、鶯、いとあはれなり、かたみに居かはりて、はねのうへの霜をはらふ
らんなどいとおかし、

都鳥、河千鳥は、友まどはすらんこそ、雁の聲は、とほくきこえたる、いとあはれな
り、鴨は、はねの霜うちはらふらんと、思ふに、いとおかし、
鶯は、ふみなどにも、めでたきものにつくり、聲よりはじめて、さまかたちも、さば
かりあてに、うつくしきほどよりは、九重のうちに、鳴かぬぞいとわろき、人の、さ

なんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかりさぶらひてき、しに、まことに、さらに音もせざりき、さるは竹もちかく、紅梅もいとよくかよひぬべきたよりなりかし、まかでてきけば、あやしき家の、みどころもなき梅などには、はなやかにぞなく、よるはなかなぬも、いぎたなきこ、ちすれども、今はいかせん、夏秋の末まで、おいごゑになきて、むしくひなど、ようもあらぬものは、名をつけかへていふぞくちをしくすごきこ、ちする、それも、雀などやうに、つねにある鳥ならば、さもおほゆまし、春なくゆゑこそはあらめ、年だちかへるなど、おかしき事に、歌にも、ふみにもつくるなるは、なほ、春のうちならまし、かばいかに、おかしからまし、人をも、人げなう、世のおほえあなづらはうしなり、そめにたるをば、そしりやはする、鶯からすなどの上は、みいれき、いれなどする人、世になし、かし、されば、いみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬこ、ちするなり、祭りのかへさみると、雲林院、知足院などの前に、車をたてたれば、郭公も、しのばぬにやあらん、鳴くに、いとようまねひ似せて、木だかき木どもの中にもろごゑになきたるこそ、さすがにおかしけれ。

郭公は、なほ、さらにいふべき方なし、いつしか、したりがほにもきこえ、歌に、卯花は、なたちばななどに、やどりをして、はたかくれたるも、ねたげなるこ、ろばへなり、五月雨のみじか夜も、ねざめをして、いかで、人よりさきにきかんとまたれて、夜ふかくうちいでたる聲の、らうくじうあいぎやうづきたる、いみじう心あくかれせんか、たなし、六月になりぬれば、おともせずなりぬる、すべていふもおろかなり、よるなくもの、すべていづれもくめでたし、ちごどものみぞさしもなき。

也有老人

蝶の花にとびかひたる、やさしき物の限りなるべし、それも、鳴く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそ、猶めでたけれ、さてこそ、莊周が夢も、この物には托しけめ、唯だ、とんばうのみこそ、かれには、や、並ぶらめど、糸につながれ、糲にさゝれて、童のもてあそびとなるたにくるしきを、阿房の鼻毛につながる。いと、は、いとくちをしき諺かな、美人の眉に譬へたる蛾といふ蟲もあるものを、子をもてる者は、その恩愛にひかれてこそ、苦勞はすれ、蜂の他の蟲をとりて、我

が子となす、老の行方をかゝらんとにもあらず、何を譲らんとて、かくは骨をるや。我に似よ〜とはいかに、おのが身を思ひあがれるにかあらん、花に狂ずるとは、詩人の稱にして、歌には、さしもよまず、蜜をこぼして、世の爲とするはよし、たゞ、人目まれなる薬師堂に、大きな巢つくりて、掃除坊主をおびやかさんとす、それも、針なくば、人には憎まれじを、

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ、朧月夜の風しづまりて、遠くきこゆるはよし、古池にとんで、翁の目さましたれば、この物の事、さらにも謗りがたし、

蟬は、たゞ、五月晴にきゝ、そめたる程がよきなり、やゝ、日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す、されば、初蝶とも、初蛙ともいふ事をきかず、この物ばかり、初蟬といはるゝこそ、大きな手柄なれ、やがて死ぬけしきはみえずと、この物のうへは、翁の一句に書きたりといふべし、

螢は、たぐふべき物もなく、景物の最上なるべし、水にとびかひ、草にすたく、五月の闇は、たゞ、この物の爲にやとまでぞ覺ゆる、しかるに貧の學者にとられて、油

火の代にせられたるは、この物の本意にはあらざるべし、歌に、螢火とよませざるは、殊の外の不自由なり、俳諧には、その眞似すべからず、

茅蜩ヒクラシは、多きもやかましからず、暑さは、晝の梢にすきて、夕は、草に、露おく頃ならん、蛸ツクボウシといふ蟬は、筑紫ツクシこひしともいふなり、筑紫の人の旅に死して、この物になりたりと、世の諺にいへりけり、哀は蜀魄の雲に叫ぶにも劣るべからず、

蜘蛛は、たくみに、網をむすんで、潜つて、物を害せんとす、まつ暮れの歌によまれ、または、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに、奸賊の心ありて、いとにくし、古代、朝敵の始として、頼光をさへおびやかしたる、いとおそろし、さはいへ、廢宅のあれたる軒に、蟬の羽などかけすてたるは、いさゝか憐れそふをりもあらんか、かれは、かひなくしく、巢つくりてこそあれ、東海道にちりばひたる宿なし者をば、蜘蛛とはいかでいふやらん、

芋蟲は、腹たつものにたとへ、毛蟲は、むつかしき親仁の號とす、背むし、客むしは、名のみして、蟲ならず、油蟲といふは、蟲にありてにくまれず、人にありてきらはる、

蠶の生涯は、世の爲に終り、火取蟲は、誰が爲に、身をこがすや。蟬蛸は、はかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は、不物ずきの誇りとなれり、さは俳諧する者を俳諧せぬ人のかくいふをりもあるべし、おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、金蟲はいやし。

蟻は、旦暮にいそがしく、世のいとなみに、隙なき人に似たり、東西に聚散し、餌を求めてやまず、いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得ん、さるも、たよりあしき方に、穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は、歐陽氏に憎まれ、紙魚は、長嘯子にあはれまる。

狗の齒に噛まる、蚤は、たま／＼にして、猿の手にさぐらる、虱は、のがる、事かたかるべし。

虱を、千手觀音と呼ぶに、蚰蜒は、梶原といへり、さるは、梶原が異名なりや、蚰蜒が異名なりや、先後今は知りがたし。

蝸牛は、たゞ、水にあるべき者の、いかで、草葉に遊ぶらん、家もちたれども、ゆく先を負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の、足なくともあるくべくば、蜈蚣、箴蟲の、數おほきは、不用の事なり。蟬螂の、瘦せたるにも、斧をもちたる誇りより、その心いかつなり、人の上にも、このたぐひはあるべし。

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ、たゞ、原吉原を、駕にのりて富士をながめゆく人には似たり。

促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるをもて、名によべる。松蟲の、その木にもよらで、いかで、かく、名をつけたるならん、毛おひ、むくつけき蟲にも、おなじ名ありて、松を枯らし、人にうとまる、一在所に、二人の八兵衛ありて、一人は、後生をねがひ、一人は、殺生を事とす、これ、松蟲のたぐひなるべし。

蟋蟀の、つゞりさせとは、人の爲に、夜寒ををしへ、藻にすむ蟲は、われからと、たゞ身の上をなげくらんを、簑蟲の、ちゝよと呼ぶは、守宮の、妻を思ふには似ず、されど、父のみこひて、などかは、母をしたはざるらん。

蚊は、にくむべきかぎりながら、さすが、卯月の頃、端居めづらしきゆふべ、はじめ、ほのかにきゝたらん、または、長月の頃、力なくのこりたるは、淋しき方もあり。

蚊屋つりたる家のさま、蚊遣たく里のけぶりなど、かつは、風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、七賢の夜咄にはいかに團の隙なかりけん。むかし、銀に執心を。こせし。住持は、蛇となりて、錢箱をまとい、花に愛着せし。佐國は、蝶となりて、園にあそぶ、そも、俳諧に、心とめし後の身、いかなる蟲にかならん。花にくるひ、月にうかれて、ふけゆく行燈の影をしたひ、奈良茶のにはひに、音をなくらんこそあはれなるべけれ。

しなさだめ

この清少納言の蟲は、螢と夏蟲とを別物として、數へても、十四疋にて、也有老人の蟲は、四十餘疋なれば、數の上にては、也有、すでにまされり、また、清少納言のは十四疋なれども、鬼の子なりとかいふ、簀蟲と、道心おこせりとかいふ叩頭蟲と、憎し〜といふ蠅と、蟻と、例の夏蟲との五疋こそは、筆にはのせられ、されば、鳥群をもとて驅りいでたれど、これはた、十九羽にて、鷺と、鴛とをうらやみたると、鶯をねたみたと、鶴と郭公とをほめたとにて、事もなきを、也有のは、蜂、蝶、蛙、蟬、螢、茅蜩、蛸、螳螂、蜘蛛、芋蟲、毛蟲、蠶、蓼食蟲、蟻、蚤、虱、蚰蜒、蝸牛、蛇、蚯蚓、蟠螂、蟹、促織、鈴蟲、響蟲、蟋蟀、蚊の二十六疋を、とりど

りに書きつらねて、或はほめ、或はそしりて、のこす方なく、殊には、蜂の、一見識あるを咎めたる、蛙の、歌よみとなりたるを羨みたる、蜘蛛の、朝敵めきたるを憎みたる、蝸牛の家をわすれぬを笑ひたる、螳螂の、ほごりかなるをいましめたる、蚊も、いさゝかはゆるすべきを辨へたる、螢の、油火にかへられたるを憐みて、序に、歌人の窮屈を嘲りたる、はてには、住持の蛇と、佐國の蝶とをさへに呼びいで來て、わが身の後の世を、かこちたるなど、心ばへありといふべし。

また、すべての上をいへば、清少納言は、柳眉のあはひに、秋の心みえて、そのおも、ちの淋しさ、冬の夕の如く、也有老人は、愁を拂ふ筈によりたる様もみえて、ゑみこたれたる面もち、春の朝の如く、また、清少納言の聲は、孤鶴の、枯葦の中に立ちて、氷をふみわるを聞くが如く、也有老人の聲は、百鳥の花間にまじりてもろごゑに轉るを聞くが如し、さはいへ、淋しきとにぎはしきとは、文章の優劣をいふにはあらず、淋しきも、よき事あり、にぎはしきもわるき事あり、よきも、わるきも、その時、その處にて、變りゆくならひなれど、初學の人の學ばんには、詞すくなゝる古代よりも、詞の豊富にて規模の大きな方より學ぶべし。

因にいふ、也有老人がには、詞遣の格に違へる所あれば、そこには、右側に、。。。のしるしをつけたれば、それはなまなびたまひそや、

第九 國文には、他國の、文語、文脈はまじふべからず、

文章は、もと、その人の思想考案をかきいだすものなれば、その思想考案の高尙なる時は、文章も高尙になり、その思想考案の野鄙なる時は、文章も野鄙になるべきは、自然の道理にて、上代の事をかけば、上代の語あらはれ、今代の事をかけば、今代の語あらはれ、支那の事をかけば、支那の語あらはれ、西洋の事をかけば、西洋の語あらはるるも、自然の道理にて、避くべからざる事なれど、こゝに不審しく思はるゝは、上代の事をかけるにもあらぬに、上代の語をまじへ、西洋の事をかけるにもあらぬに、西洋の語をまじふるなどの事なり、それも、上代はかくいへりと、か、西洋はかくいへりと、或は上代語、西洋語ならでは、その意を分明にしがたしなどの道理ありてならば、よけれど、今世の文に用ふる西洋語は、さるふかき道理を考へて用ふるにはあらず、うちまかせては、唯だ、ところへに、西洋語をまじへずては、當世の學者めかぬやうに心得てまじふるが如し、それさへあるに、近來は、また、一種のきゝにくき西洋の文

脈をもまじへたるがみゆるはいかにぞや、文章は、その人の思想考案をかきいだすものなれば、文語、文脈やすらかにて、その思想考案の語にも、よく聞きとらるゝ、如く書くをこそよしとはすれ、耳どほき古言を用ひ、聞きにくき西洋語など用ふるは、實にあるまじきわざならずや、支那學者などのかきたる文に、わけもなき支那語を用ひ、支那文脈をまじふるなども同じ事なり、殊に、支那文直譯様の文には、敬語を除く癖あり、こはいみじき僻事なり、敬語の多きは、皇國の特性にて、古來、國民の君父を畏敬する觀念は、自然に、言語の上にもあらはれ來れるものなるを、いかに、支那學者なればとて、自身の口語には、避くべからざる敬語を、文の上にてのみ避けんとするはいかにぞや、支那文直譯様の文をもてかきたる國史などには、無禮千萬なる筆法がめではあるまじうこそおぼゆれ併ながら、支那文には、敬語なければ、直譯文にも用ひぬなりともいふべけれど、さる事ならば、最初より、支那文にこそかくべきなれ、支那文には、えかゝで、なまじひに、國文には、似せながら、國文には、似もつかで、支那文めきたるはいかにぞや、この事につきて、本居翁はいへる事あり、その語に、近世人の

文に、ことさらに漢文のふりを好みて多くかきまじふるは、殊にうるさきわざなり、そはもと雅文をえざるからのまわざにて、つたなきをまぎらかさんとてぞ、そもまことの漢文の顛倒助字のおきやうなど、何くれとむつかしくところせきを假字書にては、さやうのすちにも、力いらすたゞ假字書にしたる漢國の軍書やうの物をみてもかゝるゝわざなれば、いとたやすくして、俗人の耳には、物々しく、物しりめきてきこゆるを、たけき事に思ふめる、いと心ぎたなきわざならずや、昔のよき文には、たとひ、まれ／＼にもろこしふみなる事をかけるも、ことばつきは、このふりにこそ物したれかしこのふりのまゝには、かける事なし、また、字音の詞もあれども、それはたつかひざまつゞけざまは、このふりなるをや、といはれたり、

第十 支那文直譯の文のわるきふし／＼

支那文直譯の文の殊に、國文にかなはぬふしは現在過去未來の時なり、この時といふ事は、國文にはもとよりきはやかにて、いさゝかの誤謬も、耳たちて聞きとがめらるゝを、かの直譯の文は、その區別もなく、事實の前後にもかゝはらず、一切現在に書きなすはいかにぞや、こはもとの支那文に、その區別の慥かならねばとて、それにな

らひてなるべけれど、僻事なり、それも支那文にかゝばこそさもいはめ、國文に譯しながら、時のみはとて譯さでやはあるべき、この直譯文ともいふものを讀まん、初學の人は、つとめてその讀癖にそまぬやうにすべき事なり、直譯文には、時の外にも、猶心得おくべき事あり、今、そのひとつたつをいはば、夫字を、それと訓みて、發語の辭なりといへど、支那にては、夫字は、發語の辭なるべけれど、皇國にては、それは代名詞にて、發語の辭にはあらず、また、耳字などを、句末におきてのみと訓みて、語勢を助くなどいへど、のみといふ國語は、それに限りたるをいふ、互爾乎波にて、語勢などにいふ辭にはあらず、また、猛烈なる所の發砲をなすとか、平氏は、つひに、源氏の亡す所となすなどいふたぐひの所、所となるなどの聞きにくきは、いふも、更なるべし、また、古之聖人、其出人也遠矣などの其出人也遠矣を、その人にいつるやとほしとも訓む事なれど、そのやも僻事なり、國語には、やといふ辭は、疑辭と感辭との外にはなし、さるにかゝる所のや、疑辭にても、感辭にてもなければ、これも、例の語勢にそへたりなどいふべきか、さるをかしき遁辭は、聞くべきにあらず、然かのみならずこのや、文字は、よく、人のあやまる事なれば、に序いふべし、例へば、天地の間にうまるゝ人は、とい

へば事もなきを直譯流にては、その意を、人の天地の間にうまるゝやと語勢とかをつけていふ事なれど、かくては人のうまるゝを話となりて、うまれたる人をいふ話にはならぬを、その區別もなく、同様の事と心得て、直譯文の歴史などには、また、かに書きたるは、粗漏の至りなれど、聞きとがむる人もなくて、ありふれて世にあるは、一方には、僥倖ともいふべけれど、一方には、あぢきなき心地ぞせらるゝ、また支那の虚字は、國語には、動詞として訓むは至當なれ共、彼我の語法に、相違の邊もありて、さのみもしがたき所もあれば、その時は、語性をかへて訓む事もあり、例へば、子曰とか、詩云とかいふ時の、曰、云は、支那にては、虚字なれば、國語にては、動詞として、(子いへり)(詩にいへり)とか、(子いひけり)(詩にいひき)とか、訓むべきやうなれど、古來、さは訓まで(子いふ)(詩にいふ)と訓ませたるは、支那の虚字を、動詞にうつさずして、副詞にうつしたるものなり、されば、(いふ)の下に、國文にては、別に、動詞をおく事なり、(子いふ)などの心得るは、たがへり、副詞なり、されば、(子いふ)などのいふは、さるに、(いふ)といふ語形の動詞に似たるより、その下に、動詞をおく時は、重複すと心得てか、直譯やうの文には、動詞をおかずして、(子いふ)云々と(こひねがはくは)云々あらん事をなどの如く、文尾

に、と、文字を、文字などをおきて、上のいふ、こひねがはくはなどに反歸せしめんと構ふるは、不都合千萬ならずや、と、文字を、文字などは、動詞にこそは反歸もすべけれど、いかでかは、副詞には反歸すべき、いはく、いへらく、おもへらく、ねがはくは、こひねがはくは、うらむらくは、などは、みな副詞なれば、これらの語を用ふる時は、必ず、その下に、動詞をおくべき事なり、

第十一 西洋文の直譯に用ふるあたふとつゝと

支那文直譯の弊をうけて、國文の上に、一種の病をあらはしたる事は、前にいへるが如くなるに、近年は、また、その病のある上に、それよりもわるき、洋文直譯の弊をうけかけたり、その弊も、數ある中に、殊に耳だつは、あたふといふ語を、動詞の尾辭として、(讀みあたふ)書きあたふ(みあたふ)いひあたふなどいふ事なり、洋文を讀む人のあたふといふ語を、かうざまにつかふよしは、彼方の動詞のいひかたに、可能法とて、その事の出来る意をいふに、その動詞の尾に、一種の尾辭をそふる事ありて、その尾辭の譯辭に用ふる事なれど、あたふといふ辭が、それに適當せるかなどの吟味にも及ばず、意のたゞ、すこし似たるを足れりとして、口にまかせていひならしたるが廣が

りたるなり、こは、その洋文よみが國語などの事はすこしも辨へざりしよりの事なれど、國文學者の洋文をよみて、さる不都合を、未然に防がざりしも、ひとつの落度なるべし。今、洋文を読む人も、かたへには國文を研究する人もあれば、かゝる詞遣は、遠からず消滅すべけれども、序に、その語の事をいふべし、そもく、あたふといふ語は、獨立の動詞なれば、尾辭として、他の語にそへていふべきものにはあらず、可能法の尾辭は、國語にては、古來る。らる。をもて、讀まる（みらる）などいへり、らる。を用ひぬは、べし、または、う。などをもて、讀むべし、讀みうなどいへり、

また、洋文の直譯に、つゝ、といふ辭を、動詞にそへて、讀みつゝ、あり（書きつゝ、あり）みつゝあり（いひつゝ、あり）などいふ事あり、これ、また、いみじき僻事なり、こは、彼方の動詞のいひかたに、全現在をいふ爲に、一種の尾詞をそへていふ事ありて、それを學ぶ事なれど、これも、その洋書を読む人の、國語の性を去らずして、いひいでたるが廣りたるにて、今は國文學者めきたる人も、時としては、その口語などにもいふなるは、口惜しきわざならずや、國語にていふ全現在、は、雅言なれば、四段活用、の動詞には、りといふ尾辭をそへ、一段、二段の活用、のには、たりといふ助辭をそへて、讀めり（書けり）（みた

り）（えたり）など、いひ、俗言なれば、をる。ゐる。などいふ詞をそへて、讀みをる（讀みてゐる）などいふ事にて、つゝといふ辭は、古は、更にもいはず、今もいふ事なし、その故は、もつゝ、といふ辭は、俗言のナガラ、といふ辭と、同義の辭にて、例へば、讀みつゝ、あるく（書きつゝ、かたる）などいふ如く、二個の異義の動詞の中間におきて、その事をするかたへに、また、他の事をもする意にいふ辭なり、歌には、また、感辭の如くも用ふる事あれども、文には、さる事もなし、然るに、洋文直譯のいひざまの（讀みつゝ、あり）（書きつゝ、あり）は、ナガラ、の意にはあらで、その事の、現在にしかある意をいふのみにて、そのいひざま、いたく異なり、この外にも、洋文の直譯よりうつりたる詞遣に、その事は、どのいひふ時のほど、（學校そのもの）などいふ時のそのものなどの詞遣は、殊にいやしげに聞ゆれば、心あらん人は、つゝ、しむべき事なりかし、すべて、洋文を読む人の心得は、語などはいかやうにてもあれ、その意にだに聞ゆれば、よしと思へりげにて、かの支那文を読む人の、現在、過去、未來などは、いかやうにてもあれ、敬語は、ところせきものなれば、略すべしと、事もなげにいひ思ふと一般なる考なれど、洋文を読む人も、心ある人は、さる無作法をよしと思ふ人はあるまじ、先年、加藤弘之先生に、この辭どもの事

をかたりしに、先生は、それは、洋文を読む人の、國語をしらぬ過失なりといはれたる事ありき、されば國文に、志あらん人は、かゝる詞遣は、かけてもいはぬのみならず、洋文を読む人などの、嗚呼なる事もあらば、その正しきをしらせまほしきわざなりかし。

第十二 死を^スとよぶ詞づかひ

漢文直譯やうの文を読みなれてか、近年は、國文をかく人だにも、時としては、異やうなる詞づかひする人あり、何某先生のかけるものに、^{（ねむるとス）}とスするとは、そのさまで似て異なれりとかけるをみし事あり、異なれりといふ語の異やうなるは、いふまでもなければ、死ぬる事を^スと書く事は、國文學者も、をり／＼書くやうなれど、僻事なり、これは後世例の直譯文よりうつりたる誤謬にて、正しきものには、死ぬる事を、^スとスといへる事なし、その故は、^スといふ語は、自動性なれども、^スといふ語は他動性なればなり、鎌倉前後の僧徒の書けるものには、^スを、自動性につかへるもみゆれば、その頃よりやみだれそめけん、上代は、^スは、殺す意につかひて、^スは、自らの息の絶ゆるにいへり、弑字などの訓も、その意にてつけたるなり、弑字は、常には、^スい

すと訓めど、いは音便にて、實は^スなり、詩歌を、^スかといひ、四時を、^スいじといふ時のいと、同じ事なり、漢文にても、死字は、ふるくは、^スと訓みて、^スとは訓まざりしなり、今も、論語といふ書に、鳥之將死、其鳴也哀とある、將死の二字は、^ス（^スなんとする）とは訓ませぬをも思ふべし、さるに、或人は、^スは、死を、體言として、その體言を、作用言の變格には、たらかして、いふ事なれば、障りもなく、語勢も、^スといはんよりは、^スすといふ方まさりたらんなどいへど、それは、語の活用の論にこそ、さる事もいふべきなれ、今は活用を論じてにはあらず、また語勢などいふ事は、直譯文の語勢を、定木とするからの事にて、いはゆる杓子定木の判斷なり、死は、既に、^スといふ正雅なる語の、古來ある事なるに、歌などにも、絶えて讀む事なき、さやうなる語を作りいでていふべきかは、今日の口語などにも、故さらに、四角ばりたる物いひする人こそあれ、實法ならん人誰かは、さやうなる語をつかふ人あらん、されば、雅にもいはず、口語にもいはぬ、異やうなる語は、心あらん人は、避くべきわざなり。

第十三 落合君にむくゆ

余が友、落合直文君は、戦争と國文とと題せられて、この雑誌の初號に、漢字を減して、

假字を用ひんことを論せられたり、まことに、至當の事と思はる、今は、十三四年のむかし、余假字會といふにて假字のみをもて、物を書き試みし事ありしに假字のみをもても、書けばかゝるゝを思へば、減す位の事は、相違なく出来べき事なり、先年、報知新聞は、漢字を、二千字か三千字かにさだめて書かんといひし事ありしは、今も、かの新聞は、その約を守りて、定數の字のみを用ひ居る事かきかまほし、余、また思ふに、漢字を減すに、二千字、三千字と、限りをたつるもさる事ながら、それよりも、名詞の外は、すべて假字書にする方よからんと思へり、かくする時は、字數を減す事も、十分に出来て、その上にも、送假字などいふ事もなくなりて、一層の便利を得べし、さて余が、假字のみをもて書き試みたりといひし文のひとつは、左の如し、文は拙けれど、こゝには、たゞその假字のみなるが故に、いだせるなり、

よゝのあとのはしがき

わがくにのこゝを、かきいでんに、ひとのくにのもののいひにならふらんは、をこなりとやいはまし、あらがれのつちのうへには、さまゝのくにあり、くさゝのひとすみで、くにとしもはかすまへられぬだにも、おふなく、そのくにことばをもてぞ、よろづに、ものはかきいでける、まいて、よろづのくによりもすぐれ、ちゝのくに

よりもふるくて、はやう、うましぐに、おやぐにとしもたいへきにける、みくにのみ、ひとのくにのもののいひを、まねぶらんは、いかにくちをしからずや、は、そゝ、みくに、は、ち、は、やぶるかみより、うつそみのひとのよにいたるまでは、いくちよろづとせを、かへし、ひとのよになりて、すらも、はやう、みよは、も、い、ち、あ、ま、り、は、た、ち、よゝ、と、し、は、ほ、とゝ、み、ち、と、せ、に、も、や、な、る、べ、か、ら、ん、そ、の、み、よゝゝ、と、し、と、し、の、こゝの、あ、と、を、あ、る、せ、る、ふ、み、は、こゝと、ひ、も、あ、へ、ぎ、ゆ、か、も、お、し、へ、さ、れ、ぬ、べ、か、め、れ、ど、お、ほか、た、か、ら、も、じ、の、み、に、て、み、く、に、こゝと、は、な、る、な、ん、き、こゝに、わ、が、か、な、の、と、も、は、い、か、で、ひ、と、の、く、に、の、も、の、い、ひ、な、ら、は、す、て、み、く、に、こゝと、ば、を、も、て、よ、ろ、づ、に、か、な、が、き、に、か、き、て、ま、し、と、お、も、ひ、お、こ、し、い、ほ、ど、に、お、の、れ、は、た、お、ほ、け、な、き、わ、さ、に、は、あ、れ、ど、い、ま、し、こゝゝ、る、み、が、て、ら、よゝゝの、あ、と、も、な、づ、け、つ、べ、き、こゝの、さゝ、や、か、な、る、な、ん、か、き、し、こゝは、か、の、ひ、と、の、く、に、の、も、の、い、ひ、に、な、ら、は、す、と、し、も、は、こゝと、さ、ら、び、て、い、ふ、べ、く、は、あ、ら、ず、な、が、ら、ま、だ、は、た、わ、が、と、も、の、な、に、は、づ、と、や、い、は、ま、し、あ、は、れ、か、な、も、じ、よゝ、な、だ、ら、か、な、る、み、く、に、こゝと、ば、を、つ、ぶゝと、かゝ、い、ん、に、も、じ、の、す、が、た、の、ふ、さ、は、し、き、は、さ、ら、に、も、い、は、す、さ、て、は、い、る、は、う、た、を、だ、に、つゝ、く、ら、ん、ひ、と、は、た、れ、し、の、ひ、と、か、は、よ、み、が、で、な、る、べ、き、と、ぞ、

年始狀

近年は、國文をならふ人、おほく出来たりといふ人ありて、その方の雑誌どもにも、盛りになれるさまにいへれど、いかゞあらん、各地方より余が許におこせらるの年始

狀をみるに、年々貳百五六十通より三百通位の中にて國文にてかゝれたるは、今年などは十五通のみにて、その餘はすべて敬賀新年とか賀正とか書いて、大抵は支那文なり、されば年始狀の上に支那文の勢力は國文にまさる事、ほとんど二十倍にて、余におこせらるゝ人々は、大抵は國文國史などを主とせらるゝ人々なるに、その人すら年始狀には支那文を用ひらるゝ位なれば、國文國史などを主とせぬ通常の人は、悉く支那文をこそ用ふるならめ、年始狀は年の始の試筆の如きものなるに、それにすら支那文を用ひらるゝ位なれば、一年間のあらましも、大抵さやうにこそはあらめ、さてはいかでかは國文を盛りになれりとはいはん、さて、その余におこせられたる年始狀の國文をみるに、中古文にならへるゝと當世文にならへるゝとの二種ありて、中古文にならへるゝは辭句自然に長くなり、當世文にならへるゝはみじかくなれり、余は常に當世文の方をとれり、その故は、當時の人におくるに、當時のを用ひずして、古代のを用ふるは、皇國人におくるに、皇國文を用ひずして支那文を用ひたる、例の敬賀新年やうに似たるゝところもあり、殊には文辭の簡略なるをよしと思へばなり、

第十四 は。べ。る。さ。ぶ。ら。ふ。

消息文には侍。候。ふ。といふ語のあらはるゝは、常の事なるを、消息文ならぬ文にも、この語をかく人あれど、僻事なり、兼好法師が徒然艸などには、殊に多く用ひたれど、あやまりなり、侍。候。ふ。といふ語は、もと高貴の人に對していふ時あり、をり。などいふ語に代用する敬語にて、尋常の文に用ふる語にはあらず、されば古人は尋常文には、あり。をり。などを用ひ、對話文には侍。候。ふ。を用ひて、尋常文と對話文とを、一文章中にもかきわけたり、竹取物語、空穂物語など、みなその定なり、さるに、宮中に伺候せる女房などのかける物には、時としては對話ならぬ所にも用ひたるがあるは、人に示さん時の心しらひもあるべく、または、常につかふ敬語のふと、筆にもうつりたるなどもあるべし、然か思はるゝよしは、紫式部日記などには、對話ならぬ所にも用ひたるがあれど、同人のかきしなりといふ源氏物語には、竹取物語、空穂物語などの如く書きわけたればなり、さるに、その後の物にて、定家卿とか家隆卿とかいふ人々のかける物には、一切その區別もなくて、いつくも侍。候。ふ。とを用ひたるより、歌人ときこえし人の文どもは、みな、それにならひて尋常文語も、對話文語もちま

せてにて折角古人のさだめたる語法も、ひたくづれにくづれたるを、そのまた流派をうけたる人は、今も猶侍る候ふをいはれもなき所にもちひて、その甚しきは、他人の語にさへつて、何某より何々をおくり侍りければ、いひつかはし侍るなどかくはいかにぞや、されば支那學者などは國文には侍るといふ語は、必ずもちふるものと心得て、國文をさして侍文（ペルグ）ともなづけて、國文の一名の如く呼びなして、あまつさへ侍文は世間の實用にかなふものにはあらず、歴史などはかゝるものにはあらずなどいふはや、

第十五 詞づかひの大切なる (二)

詞づかひの大切なることは、前號にもいへるがごとくなるに、こゝに、また殊に、人の等閑にするより、常にあやまる一種の詞遣をいふべし、そは世にいはゆる領格といふ格の文字にて、領格ののとは、源氏の軍平家の武士などいふ類の、二個の名詞のある事なれど、それらのおくは、文字にて、このの文字には、種々のおもしろき變化もといふ題にて、追々にいふ事あるべし、心得このの文字は、名詞と名詞との、單一の連合にて、半の角銀の皿などの如くいふ時は、事もなければ、下の名詞のうへに、種々の語をかさぬる時は、ふと落して、主格とまぎらかす事あり、古書などにもおちたりとお

ぼしきも、數多みゆる事なるを、その古書どもをみる人の、落ちたるには、心もつかで、かうやうにも書くものなりと、等閑に心得るもありて、世に、大先生、大學者ときこえたる人どもの書きたる物にも、昔も、今も、折々は、その誤謬もみゆるなれば、初學の人のあやまるべきは當然の事なれども、それは、た心をだに用ひなば、さしてむづかしとにもあらねば、だゝ、その心しらひのあるやうを悟るべきなり、抑も、このの文字の、あるとなきとにて、その意のかはる事は、例へば、源氏物語繪合卷に、湖月抄本（十一丁）、この人、とりぐに論するをきこしめして、ひだりみぎとかたわかたせたまふとある人、は異本には、人々（の）との文字あり、さては、意かはるなり、異本の如くなれば、きこしめす人も、かたわかたせたまふ人も、人々（と）とある人にはあらで、別に、その人ある意となり、湖月抄本の如くなれば、きこしめすも、かたわかたせたまふも、人々（と）とさゝれたる、その人の事となるなり、さて、こゝは、いかにといふに、實は、人々（と）とさゝれたる、その人の所爲にはあらで、別人、すなはち、源氏の君の所爲なり、また、同書、初春卷に、湖月抄本（十六丁）、朱雀院きさいの宮の御方などめぐりけるほどに、夜もやうくあけゆけば、水うまやにてことそがせたまふべきを、例ある事より外に、さまことにことくはへて、

いみじくもてはやさせたまふとある朱。雀。院。は異本には、朱。雀。院。の。と。の文字あり、さては、意かはるなり、異本の如くなれば、めぐりける人も、もてはやさせたまふ人も、朱。雀。院。にはあらで、別に、その人ある意となり、湖月抄本の如くなれば、めぐりける人も、もてはやさせたまふ人も、朱。雀。院。の事となるなり、さて、こゝは、いかにといふに、實は、朱。雀。院。の所作にはあらで、別人、すなはち、源氏の君の所作なり、また、同書幻卷に、抄本、十、五、中將の君ひんがしおもてにうた、ねしたるを、あゆみおはしてみたまへれば、いとさゝやかにおかしきさましておきあがりたりとある中將の君は、異本には、中將の君の。と。の文字をそへたり、湖月抄本の如くにては、見たまふ人は、中將の君の如くなれど、こゝは、實は、源氏の君の見たまふなれば、異本の方正しとすべし、また、同書句宮卷に、湖月抄本、三宮、年にそへて、心をくだきたまふめる院の姫宮の御あたりをみるにもとある三宮は、異本には、三宮の。と。の文字をそへたり、湖月抄本の如くにては、みる人は、三宮の如くなれど、こゝは、實は、薰大將のみる事なれば、異本の方正しとすべし、また、例へば、紫式部日記に、下卷、前なる人々の内わたりは、猶、けはひことなりけり、里にては、今はねなましものを、さも、いざとき沓のしけさかなと、いろめかしく

いひ居たるをき、てとあるなども、人々の。と。の文字のあればこそ、人々といふ人は、物語する人となりて、その物語をきく人は、別にある事もしらるれども、もし、の文字を書きおとしもせば、人々とき、れたる人は、やがて、その物語をきく人となりて、物語する人は、別に、その人のある事となるべし、されば、兎にも角にも、領格の。の文字は、慎むべき辭にて、古書どもにも、これかれ誤謬もある事なれば、よく、その心しらしめて、讀みもし、書きもすべきなりかし、

第十六 口語も、筆語も、やすらかなるべし、

言も、文も、耳にき、やすく、目によみやすくて、きく人、よむ人の、よく、心に會得せらるるやうにつとむるをこそ、學者の本意とはすべきに、ともすれば、怪しの言をつかひ、異やうなる文をかきて、我たけく、世に銜ふはいかにぞや、言も、文も、きく人、よむ人の、心にさとりてこそ、よきも、あしきも、いたれるも、まだしきもしらるゝ、わざなるを、聞きて、我はがほに嘯りありくは、片腹いたき心地ぞせらるる、もと、言は、おのが心を、人にしらする道具にて、文は、それを、文字にしたる迄なれば、孰れにしても、人にしらす

る目的の十分に届かずては、その詮もなき事なり、人を罵る言にても馬鹿といへばいはれたる人は怒るべけれど、白痴といへば大抵の人は怒る事なかるべし、こは馬鹿といふ語はよく耳にいらり、心にとほりて、その罵られたる事をしる故にて、白痴といふ語は常に支那の小説にてもよむ人はしらず、一般の人は耳にもいらす、心にも感せねばなり、されば白痴の類の語をつかふ人は、我みづからこそ、猛く人を罵りつとは思ふらめど、それを聞く人は何事ぞとも感せねば折角の骨折は無駄骨折にて、ただ一場の悪聲にこそなりはつべけれ、兼好といふ僧は、はやうこの道理を辨へたりとおぼしくて、その書きたる物に、詞遣の不適當なりしが爲に、その目的を達せざりし話をのせて、高野の澄空上人京へのぼりけるに、細道にて馬に乗りたる女のゆきあひたりけるが、口引きける男、あしく引きて、聖の馬を堀へおとしてけり、聖いと腹あしくとがめて、こは、希有の狼藉かな、四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり比丘尼よりは、優婆塞はおとり、優婆塞よりは、優婆夷はおとれり、かくの如くの優婆夷などの身にて、比丘を、驢に蹴いれさする、未曾有の悪行なりといはれければ、口引の男、いかに仰せらる、やらん、えこそききしらねといふに、上人、猶いきまきて、何

といふぞ、非修非學の男と、あららかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひける、氣色にて、馬引きかへして逃げられにけりとしるして、その評に、たふとかりけるいさかひなるべしといへり、罵りたる惡口は罵りたる人のみ心得て、罵られたる人は、何事ともわきまへねばだ、口角に沫をふく、世に異様なる面相の、忽然として現出したるを驚くなるべし、かく、怪しの物いひをよろこぶ人は、今も昔もきこゆる中に、平田先生のかきたる物には、殊によく、その類を、とりあつめていはれたり、その詞に、

トカク、世ノ生ナマ漢學者ドモナンド、僅ニ、四書五經トカ、左國史ハ漢ノタケヒテモ見
カザルト、ヤガテシヤラ臭クナツテ、オノレ漢學者ヨト名ノリガマシク、音聲マ
デチカヘテハ、シカミノ祭禮ナドト論語ヨミト、賤シキ口ズサミニモアル如ク
生シヤウガ姜マツリト申シテモ宜シイコトチ、ハシカミノ祭禮ナドト云ヒ、トカク不フ斷
モ、赤縣語カハコトバテ物チ云ヒタガリ、平目ノ汁ニ金ガシラノ燒物ヤキモノト云テヨイニ、平目ノ
アツモノニ、金頭キントウノアブリモノナドト云ツタリ、マタ今日ハ、風ガ吹イテ、眼ニ砂サ
ガハイルト云テモ宜カラウニ、今日コンジツ暴風ニシテ、小石眼中ニ投ズナドト云フヤ
ウナ輩ガ多イデゴザル、マタ、近頃、蘭學者ト云テ、和蘭陀ノ學ヲスル輩ガ、トカク、
和蘭陀語テ物チ云ヒタガリマスガ、是ハ、漢語カンゴテ物チ云フヨリハ、モツト惡イ、先
立テ、芝邊シバノヘヲ通タル砌、若キ醫者坊ガ二人ヅレ、先ニ立テ行ク處ガ、其内、一人ノ醫
者坊ガ、シキリニ、和蘭陀語テ、咄チ致シカケル處ガ、一人ノ醫者坊ハ、一向、和蘭陀

語ハ知ラヌト見エテ一々問ヒ返スト、ソノ生蘭學者ガ、跡テハ、其語ノ講釋ヲスル、其位ナラバ、イツリ、知ラヌ人ニハ、蘭語テ物ハ云ハ子バ宜イガト、後テ可笑シク思ツテ聞キツ、行ク處ガ、終ニ、和蘭陀語テ物イフ醫者ガ、蘭語ヲ知ラヌ醫者ヲ指シテ、足下ノヤウニ文盲ナル人モナイ者ダト、嘲笑マシタガ、是ハ、ケツク、蘭語テ物云フ奴ガ文盲デゴザル云々、一體、今ノ世ノ人ノ常云フ言ガ、四分ハ御國ノ眞ノ言葉テ、四分ハ漢語、二分ハ天竺語デアアルケハ、昔ヨリ致シテ、赤縣學ビ佛學ビチスル輩ガ、丁度、近頃ノ蘭學者ドモガ、人ノ耳ヲ驚カシテ、我ハ顔ニ、和蘭陀語ヲマシエテ云フヤウニ、人ニ誇リ、珍シガラセヤウト、打交ヘ來ツテ、世ニ弘ガリ、今ハ、世間一般ニ云ヒ馴レテ、世ノ常ノ人ナドハ、大カタ、戎言ヤラ、御國言ヤラ知レ難ルヤウニ川ヒ馴タモノデ云々、川柳ガ句ニモ、失念トイヘバ立派ナ物ヲスレト申シタル如ク、忘レマシタト云フヨリハ、失念イタシマシタト云フ方が、丁寧ノヤウニ聞エルノハ、皆ツカヒ馴レタル故デゴザル、是ニツケテ、町ノ若イ者ガ、二人ヅレテ來ルト、向ウカラ、侍ガ、一人來タガ、其若イ者ノウチ、一人ガ、ソノ侍ニ、知音デアツタト見エテ、辭儀ヲ致シナガラ、旦那、キノフハ有リガタウゴザリマシタト云テ通リスガフト、連ノ一人ガ申スニハ、其方ハ、ゾンザイナ物云ヒチスル男ジヤ、旦那衆ニ對シテ、キノフハ有リガタイト申シテハ、無禮ザヤ、昨日ハ有リガタウゴザリマスルト云フモノジヤ、マタ、モツト重イ旦那衆ニハ、一昨日ハ有リガタウゴザリマスルト云ハネバナラヌモノジヤト申シタレバ、其

一人ノ男ハ、感心シテ和主ハ、何ノ問ニ、ソナ物シリニ成ツタト申シタト云フ咄ガアルガ云々、斯ノ如ク弘マツテハ、今更、ドウモナラヌ處ヘ、古學チスル輩ガマタ、ヤミクモニ耳遠キ古言チマシヘテ云テハ、一向ワカラヌヤウデ有ラウカラ、不斷ハ、平和ニ物ヲ云ヘ、古學者ゾラハ致スナト、門人等ニモ常申スコトデゴザル、

と云はれたるは、實にさる事にて、學問せん人は、何の學問にもせよ、その方にひかるものなれば、その心して、奇癖を生せぬやうにせまほしきわざなりかし。

第十七 消息文のうつりかはれるさま

平田先生のかける物の中に、文詞などの、後世にくだるにしたがひて劣りざまになる事を論せられて、盗人の手紙の文と、定家卿家隆卿の手紙の文とを並べあげられたり、盗人の手紙は、今昔物語にのせたものにて、定家卿家隆卿などの世よりは百五六年十ばかりの昔なるに、そのさまの、いたく變れるをみて、よろづの語の、古今と移りかはりゆくさまの、大方はしるるべし、さて、その盗人の文は、

一トセノ坪屋ノ事チ思ヒ出ヨ、ソノ事ノ、今ニ忘レ置ケレバソノ畏リチ申スベキ方ノサフラハザリツルニ、斯ク登ラセ給フ由チ承リテ迎ヘ奉ルナリ、ソノ嬉シサハ、何レノ世ニカ忘レ申サン、其夜、マダヅラニ成ナマシカバ、今マデ斯クテ

侍ラマシヤハト思ヒ給フレバ限リナクナン

定家卿の文は、

毎月ノ御百首、能々拜見セシメ候ヒヌ、凡此ノタヒノ御歌、マコト有カタウ見申
候ハ、年來愚ナル心ニ辱ナキ仰ノ否ミ匣サバカリチ省ミ候トテ、僅ニ、先人申
オキ候ヒシ庭訓ノ片ハシチ申候ヒキ云々

家隆卿の文は、

何事カ候ラン、此庚申ノ歌ニヤミ伏テ無術候、眞實ニ、今ハ、ムゲノ事ニマカリ成
候云々、但シ、此歌、一切ニ、御口ヨリ外へ出ベカラズ、其故ハ、主オボエス候間、カタ
カタ憚リ存候ナリ云々

この手紙の文は、平田翁の物にかきたるを、そのまゝにて寫しいでたるなれば、本書
と引合せば文字などの違ひはあるべけれど、詞遣のおほかたは、これにても知らる
れば、今は、故さらに、本書よりはひきいず、

この消息の文につきて思ひいでたる事あり、そは、余が常にかく手紙の文に、漢字ま
じりの平假字文を用ふる事は、たゞ、読みやすかれとて書く事なれど、かく書きそめ
しは、今は、十五六年の昔なるが、一日、芝の近藤眞琴先生を訪ひしほど、先生、當時の手

紙の文を論じて、手紙の文は、漢字まじりの平假字文にすべし、今の手紙の如く、一筆
致啓上候にては、一筆といふ男が、何か啓上する事となりて、かくては、とても、日本に
ては、文法などは、説きがたかるべしといはれたりし事の、耳あたらしく、尤に思はれ
しよりの事なり、

第十八 作文の心得

主格の下への文字

文の主格の下への文字をそふる事について、年頃いぶかしく思へる事あり、文の主
格とは、(鳥なく)花かうばしなどいふ時の、鳥花の類の語に、その故は、の文字をそへて、(鳥のな
く)花のかうばしといふとの、文字をそへずて、(鳥なく)花かうばしといふとの區別の
おぼろげなればなり、さるは、の文字をそへたるは、そへぬものに較ぶれば、その動作
状を、慥かにいふが如くなる所もあれど、また、必ず、さやうにともおしきはめがたき
所もありて、兎にも角にもいぶかしければ、まづ、その、の文字のあるものとなきもの
との多少を、古文と古歌とによりて比較せば、やと思ひたちて、多年の間、これかれを
みくらべしに、文に、の文字のあるものは、なきものの百中の一にだにも當らずして、

殆どなしといはまほしき有様なるに鎌倉前後よりはかつ／＼にみえしらがひて百中の二三ともなり四五ともなり六七ともなりて後世に降るにつけて追々に増加したるが如く、またそれより以前に遡れば七六となり五四となり三二となりて次第に減少しゆきて藤氏の時代にいたれば例の百中の一にだにも足らぬ有様となるを思へばこの文字は文にては古代の正しき物には決してなかりしなるを藤氏前後よりふと誤りたるものに相違なからんて奈其時代の物もしらべての調へも思はず但しそれは調ふる暇のなくであるといふに悟るべしまた歌は文と反對にての文字をそへたるもの却てそへぬものよりも多し然れどもそのそへたるをみれば大抵は互爾乎波の二段の係辭として二段の結辭すなはち連體言を用ひたるを思へば別にその理由のある事を察すべしその由は下また稀に一段の係辭として一段の結辭すなはち終止言を用ひたるは悉く互爾乎波の終止言にてその終止言も大抵はけりを全現在に用ひたるにて全現在とはその動作の今現に然かるを意になる事あり特に歌にてはけりその外はかなつて動詞にけりをそふる時はそのりは嘆息の意をふくむ事なりその外はかなつて一種の嘆辭に用ふるものありなどなるを思へばその動詞の終止言を用ひぬ事と他の互爾乎波辭を用ひぬ事

とは別にそのいはれのあるべきを察すべし抑も歌は古人もいへるが如く詠嘆の聲にて辭句の間につとめて感慨惻怛の意をやどすを主とするをもて文字のおきやう詞のつかひやうすべて文とは其趣を異にする事ありされば文にはいはぬ語も歌にはいふもあり文にてはきこえぬ詞も歌にてはきこゆるもあり文にては互爾乎波のたがふといふも歌にてはたがはずといふもあるは歌よむ人はみなよくしれる事なれどこの文字も實は歌の詞遣のひとつにてその歌に嘆息の意をふくめんとてのしわざなりさるはその結辭に連體言を用ひたるはその連體言の下によかななどの感辭をそへてきくべき料なり古今の（みよし野の山の白雪ふみわは人ノオトツレモセヨ今頃はドウシテナルカの意またちるとみてあるべきものを梅の花うたてにほびの袖にとまれるハアヤニクニ句ヒノ袖ニトマレヨ、コレガナクバ忘レテシまたその結辭に終止言を用ひたるもかなはいふまでもなくけりつゝのたぐひも嘆息にきくべきのみなるをみれば新古今の（むすぶ手に影み月のかたふきにけり）はアキモセヌニアレ、アノヤウニ月ノカタアクワイ、ドウモ、シカタガナイ、ドウセウカの意また拾遺の（梅の花春よりさきにさきしかどみる人まれに雪のふりつ）はミル人モ稀ニテアレ、アノヤウニ雪ノフルワイ、ナント、折角サイタモノナ、チシイモノデハナイカの意なり歌にの文字を用ふ

るは、嘆息の意をふくむる目的なれば、一首の中、既に、感詞、感辭などありて嘆息の意の十分せるには、歌にも用ふまじき事あきらかなり、されば主格の下への文字は、文には更にいはず、歌にも普通には用ふまじきなれど、文中の句節にあらはれたる名詞の主格としてみるべきものには、また、必ず用ふべき一格あり、そは、その句節にあらはれたる名詞の下に、必ず、源氏行幸卷のあべき、いかにうれしからん、土佐日記、海の、大和物語、院の御消息のいとうれしくて、おそろしければ、かしらもみなしらけぬ、かく色ゆるされ侍る事などきこえ給ふ、徒然草、されば、何かは、徒然草、かゝる事の、いつぞ、著聞集、七卷、御酒とくまぬりた、女のはづかしからん、そやありしかと覺えて、まへ、只今、なぬのふり候はんす、るぞといなどの辭、或は、よかななどの嘆辭のあるべき所なり、されば、文には、普通主格の下には、の文字はおくまじきに、百中の一二にもせよ、古書どもに、その跡のあるは如何といふに、そは、歌の詞遣より導かれて、ふと誤りしもあるべく、また、さらでもその記者の、ふかく、意を用ひずして書きあやまりしもあるべく、殊には、その書を傳寫せし時の筆のあやまり多かるべし、然か思はる、由は、伊勢物語、九段の、その澤のほとりの木のかげにおり居て、かれいひくひけり、その澤にかきつばたの、いとおもしろくさきたりとある、燕子花の、の文字、また、百十九段の、むかし、女の、あだなるも

の、かたみとておきたる物どもをみてとある、女の、の文字は、朱雀院の塗籠御本とてある伊勢物語にはなく、また、源氏物語、竹河卷の、湖月抄本、四、まづ、むかしの御事おもひいでられてなんなどきこえたまふ、御聲の、あてにあらぎやうづききかまほしういまめきたりとある、御聲の、の文字は、異本にはなく、また、同書、蜻蛉卷の、湖月抄本、七、ワ、とかくそ、の、かしやりつ、雨の、いみじうふりつるまぎれに、母君の、わたりたまへり、とある、母君の、の文字は、異本には、もとあれば、これら、與に、傳寫の誤りなる事しるければなり、されば、この、の文字の遣ひやうは、きはめて大事なるに、手本ともすべき古書どもにも、傳寫の誤謬もあれば、殊に、よく、意を用ひてつかふべき事なりかし、今、古書どもよりふとみいでて、いかにぞと思はる、を、ひとつ、ふたつ、左にいだせり、よしや、あしや、讀み試みてさとりべし、

更科日記扶桑拾葉抄本、十三丁、

夏は、やまとなでしこの、こく、うすく、錦をひけるやうになんさきたる、

十訓抄八丁、

昨日の鯉の、明月珠をふくみて、池のほとりにおきて去りぬ、

徒然草 五段十

造作は、用なきところを造りたる、みるもおもしろく、よるづの用にもたちてよしとぞ、人のさだめあひ侍りし、

古今著聞集 九卷、一丁、

武士一人をば、たのみてもたせおはすべき事なりとぞ、九條大相國の、二條院へは申したまひける、

同書 十七卷、十五丁、

いそぎいでてみるに、實にも、僧正のあまたの僧をぐしておはしたり、

同書 二十九卷、二丁、

また、池の中島に、もちの木あり、貞保親王の木の下に、岩の上に座したまひて、常に、笛をふかせたまひけり、

直譯文のわるきふしぐ

外國文を直譯せる文の、國語特有の妙味をそこなへることは、かの束髪せる女子の、天然の美貌をそこなへると、一般のことにて、惜みても、猶あまりあることなるに、洋文の直譯にいたりては、また、殊に聞きぐるしけれど、その詞遣の餘りに國語と懸隔

せるが爲に、二三の詞遣を除く外は、口語にも、筆語にもまじる事なければ、その害をうくる事も、また支那文の直譯の如くにはあらぬを、支那のは、五六百年以來、殊に、維新前後、近く明治十二三年の頃までは、布告布達の公文は勿論、學校の教科用書、學者の著譯僧侶の法話雜誌、新聞紙の論說よりはじめて、日常の記録手簡の文にいたるまで、一切、その直譯文を用ひしをもて、さらでも直譯文を讀みなれての口語には、自然に、その語脈もまじるなるを、四角ばりたる物いひを壯快なりと誤解せる人は、故さらに、口語にませて、人物の間などにも、同じ位といひてもよきに、(兄たりがたく、弟たりがたし)などといひ、また、事件の間などにも、毎々なりといひてもよき所に、(一にして足らず)など、物體をつけて聞きとりがたく言ひなすさへあれば、その書ける國文は、支那學の力を假らでは會得しがたきものもありて、平易なる文にてすらも、錯雜せる事實、深奥なる學理などの説明には困難なるを、まして、今日の如く、その説明の文をさへに艱澁ならしむる時は、到底尋常の人には、その事實、その學理などは會得せしむる事能はざるに至るべし、この頃或人師範學校の教科用書にすとて、二三部の日本歴史をもて來て、そのよき物を書いてとあるにつけて、その書どもをみ

るに事實のいかにぞや思はるゝもあれど、まづその文をみれば、例の直譯文にて現在、過去の區別なきはもとより、自他の區別さへも判然せぬがあるに、全篇を通じていへば、その艱澁なる事宛も、木片もて、漢を拭ふ心地ぞせらるゝ、例へば、神武崩ジテ手研耳纂立セントシ、應神ノ立ッ、庶兄麿坂忍熊叛ク、皆人心附カズ、踵ヲ旋ヘサズシテ敗亡セリとある、應神ノ立ッの如き、太子馬子ト、朝政ヲ釐革シ、首ニ佛教ヲ興ス、勝海守屋ノ誅セラル、太子以テ佛天の冥助トナシ、四天王寺ヲ難波ニ建ッとある、勝海守屋ノ誅セラルの如きは、與に、その事のありし時をいふ意なるべけれど、斯くの如き文法にては、時をいふとは聞えず、また、磐井火豊二國ニ據リテ叛キ、高麗百濟任那ノ貢物ヲ抑留シ、西國ヲ奄有セント謀ル、大連物部麿鹿火ニ斧鉞ヲ授ケテ往テ伐チ、磐井ヲ斬ルとある、往テは、何處に往くにか、その場所もさだかならぬに、授クと往クと伐ッと斬ルとは、同一人の所爲の如くもみえ、また、同一人の所爲には、あらぬが如くもみえて、曖昧に思はるゝは、余が僻目か、また、天旱シ水涸ル、阿利真公高城ヲ造リ、垂水岡本ノ水ヲ宮中ニ引ク、垂水公ノ姓ヲ賜フとある、造ルと引クと賜フとも、同一人の所爲とはみえねど、二人の所爲とする時は、主格に不足あれば、猶一人の所爲な

るべけれど、然る時は、眞公は、姓を授くる人となりて、姓を受くる人は、別にある事となるべく、兎にも角にもむつかしとの評は免れざるべし、されば國文に志あらん人は、勉めて、直譯文の弊習に染まぬ様にせまほしき事なり、それについて、初學の人の心得にもなれかしとて、かの歴史の中より、一種の詞遣を次にしめせり、こは、常に、よく、人のつかふ語もまじれ、ども、みな直譯文の語にて、國文には古來用ひぬものなりとしらるべし、

之をに 例へば、風俗云々、山間ニ窟穴ヲ造リテ之ニ居ル、武埴安彦叛キ云々、大彦

以て 例へば、柱礎ナ地底ニ起シ、氷椽ヲ空中

所 例へば、玉牆内國は、大國主ノ日ル所、虛空

爲に 例へば、玉牆内國は、大國主ノ日ル所、虛空

是に於て 例へば、百濟ヨリ、佛僧、幡蓋、經論ヲ獻シ、其功徳ヲ稱

初 例へば、百濟ヨリ、佛僧、幡蓋、經論ヲ獻シ、其功徳ヲ稱

既にして 例へば、百濟ヨリ、佛僧、幡蓋、經論ヲ獻シ、其功徳ヲ稱

この外にも、例へば、是を、人皇第一世神武天皇トスといへるスも、あるまじき詞遣な

り、かくては、その歴史の著者が、何人かを、神武天皇にしたる事となるべし、また、吾田君、二女ヲシテ、百机ノ飲食ヲ進メシム、尊其妹ヲ納ル。といへる納ル。も、いかゞなる詞遣なり、こゝは、家にいれて、娶りたるをいふなるべけれど、娶る事を納ル。とのみいふ事は、余も昔も、國語にはなき事なり、また、邪馬臺は大倭ナリ、是レ西國ヨリ、使ヲ通ジタルハ、大倭、奠都以後ノ事タリ。といへるタリも、支那文の直譯語なり、かゝる解釋文は、國文にては、その文尾になり。を用ふる事なり、また、三韓貢獻奕世絶ユルナシ。といへる、絶ユルナシも、國文にては、絶ゆる事なしと、事。といふ語をいれていふべき所なり、また、雄略帝以來造營ノ術漸ク精キモ、皇宮ハ、猶ホ茅ヲ葺ク。といへるモは、いはゆる雖のモにて、風ふくも。寒からず。空くもるも。雨ふらず。などの如く、今人も、常に、よくいふ事なれど、これも、支那文の誤訓より來たるものにて、かゝる所は、國文にては、漸く精しけれども、風ふけれども、空くもれども。といふべき所なり、かへすぐも、初學の人初學の時を大事にして、わるき讀癖に染まぬやうにせらるべし、これ學問の上の第一の用意ぞかし。

第十九 職官姓氏等の名稱をみだるまじき事

皇國の古史を讀むには、勉めて、姓氏職官の名稱を、正しくすべしとは、はやう、先輩もいはれたるを、學校の教科本とてある歴史には、その名稱、これかれ一様ならずて、眞字をさへに書加へたるもあれば、初學の人は、同一人を別人の如く思ひなすもあるべし、假字遣もまたみだりにて、或歴史には、嫡字の訓に、オバを用ひたり、オバは祖母にて、伯母、叔母にはあらず、オチも祖父なれば、伯父、叔父とは混すまじきを、かゝる類の假字遣の、きはめて多きは、實に紛らはしき事どもなれど、假字遣の事はしばらくおくとも、名稱だにも嚴重にせまほしき事なり、この頃例の支那直譯文の歴史をみしほど、ふとみいでたるを、一個、二個いはゞ、天忍穗耳尊を、アメノオシホニノ尊と訓み、(卑人)を、ハヤトと訓み、(天富命)を、アマトミノ命と訓み、(道臣命)を、ミチオミノ命と訓み、(靱)を、ユキへと訓み、(國造)を、クニツコと訓み、(百机)を、モ、ヅクエと訓み、(神八井耳命)を、カムヤツキ、ミ、ノ命と訓み、(品部)を、ホムチベと訓み、(伴造)を、トモツコと訓み、(鳥取)を、トットトリと訓み、(稚郎子)を、ワカイラツコと訓み、(佐伯)を、サイキと訓み、(彦主人)を、ヒコウジと訓み、(防人)を、セキビトと訓み、(下道眞備)を、下道眞備と訓み、(藏下麻呂)を、クラシタ麻呂と訓み、(向原)を、ムクハラと訓みたる類、枚舉に堪へず、此はむかしの傍

訓の誤れるを、心もつかで、その儘に取りたるもあるべく、また、著者が自身の推量にて、よき加減に拵へたるもあるべし。去年秋の頃、京都に物せしほど、何某博士の書けりとかいふ日本歴史の稿本をみしに、傍訓を、こまやかにつけたる中に、シマノウラ島郎と訓むべきを、シマヲトコと訓ませ、アノ海部主と訓むべきを、ウミベウミベノキミと訓ませ、アナオリと訓ませ、カキベ民部と訓むべきを、タミベと訓ませ、ヤカヒメ宅媛と訓むべきを、イヘヒメと訓ませ、クニカス國懸と訓むべきを、クニカケと訓ませ、ハシヒメ間人皇女と訓むべきを、マビトマビトノワウヂヨと訓ませたるをみて、推當訓のみだりなるは論もなけれど、世には、かゝる書もある物かと物憂くおぼえて、傍訓はなき方よからんと忠告せし事のありしに、今はた、眼前に、刻本の教科用書にて、それと同様なるをみたる事よ、著者の、古史を重んぜずして、その名をみだるはいかゞはせん、唯だ、かゝる書の流布と共に、その誤訓に口なれて、學齡童子の、あらぬ讀癖に習ふらんは、嘆かはしくまた慨はしき事なりかし、我が國學院の賛成員は、既に、三千餘人ありとかきく、三千餘人の賛成員には、學校の教員もありて、右の如き歴史をみたる人々もあるべし、あはれ、人々、古史は、先輩もいへる如く、國民たる者の、大切にして讀むべき物なり、余は、淺學にして、古

史の名稱を、廣く考證して、訂正すること能はずと雖も、先輩の、既に考定せるもありて、學校用の歴史を讀まんには、差支のあるべくもあらねば、閑を得ば、小冊子に物するか或は國學院雜誌の餘白を假りて、人名、地名、姓氏、職官等の正訓を集めて、賛成諸君の閱覽に供ふべし。

第二十 地方賛成諸君に申す

余が世繼の歌に用ひたる故事または、成語の出所などにつきて、これかれと問はるる事どもは、これ迄は、郵問せらるゝ毎に、御答も申し來たりしかど、去月中旬以來は、郵問の數も俄かにふえて、とても、一々には御答も申しかぬる事となりし上に、同様の御答を、東西南北に向ひていたす事は、實に煩しきに堪へぬ譯もあれば、右の歌の、すべての故事、すべての成語をとりあつめて、別に、小冊子に物するか、或は國學院雜誌の餘白を借りて、少々づゝ、記載するか、兩様の中、孰れかの方法にて、御答に代へ申すべければ、去月中旬以來の郵問に對して、御答を怠りし無禮の罪は宥めさせたまへかし。

序に申す、賛成員諸君の中、小生が著書中に、字音假字遣教科書といふ物のある

由を記載せるをもて、諸方を求めたれども無かりきとて、毎々郵問せらるゝ事なるが、かの書は、いまだ上木せぬ故に、書林にはなきなり、然れども、草稿もある事とて、これかれ、上木を勧むる人も多ければ、今度、互爾乎波教科書、假字遣教科書の兩書を増補訂正して、題號の教科書の三字を削り、互爾乎波、假字づかひと單稱し、更に、詞づかひの一部をもそへて、上木する事となりし序に、字音假字づかひも、その單稱の假字づかひの中に收めたれば、この事も、一言申しそへおくなり。

第二十一 國文にこゝろさせる人の心得

國文にこゝろさせる人は、文にもあれ、歌にもあれ、今のもいにしへのものも、我のものも、その詞遣の上、假字遣の上などに、心をとめてみるべきはいふも更にて、支那文、西洋文を讀まんにも、その心得なかるべからず、太宰純が倭讀要領といふ書にも、支那文の古來の讀法を論じて、古來ノ讀法ハ、漢語ヲ譯シテ、倭語トナスコトヲ貴ビ、漢語ヲ取テ、倭文倭歌ノ用ヒタル者ナリといへり、さればにや、文選、楚辭やうの書の古訓には、讀法の用意きはめて面白くて、進字、退字などは、處によりては、すゝみゝしりぞくとのみは訓ませず、すゝめりゝしりぞけり、すゝみたりゝしりぞきたりと訓ませたるもあり、また告字、起字なども、つぐおくとのみは訓ませず、つげたり、おきたり、つげぬ、おきぬと訓ませたるもあり、また、進字、告字などを、對句のやうにて並べたるは、進字の方は、すゝめりと訓ませ、告字の方は、つげたりと訓ませて、進めりと告げたりとをもて相應せる語法としたるもあり、または、茂字、榮字などを、對句のやうにて並べたるは、茂字の方は、しげしと訓ませ、榮字の方は、さかえたりと訓ませて、茂しと榮えたりとをもて相應せる語法としたるなどもあり、こはいづれも、過去、現在などの時を調へんとてのまわぎにて、古人の讀書の用意いたれりといふべし、支那文は、時の區別、きはめておぼろげなるを、それにすら斯くの如くなれば、そのかける國文の正しきは宜ならずや、さるを、太宰純は、同書に、漢文は、句讀を正して讀むべしとて、左傳の定公三年の處の文を、邾子在門臺臨庭闢以餅水沃庭、邾子望見之怒闢曰夷射姑旋焉命執之弗得、滋怒、自投于牀、廢于鏹炭爛遂卒の如く、時の區別も何もなく、無作法に讀ませたるを、かゝる讀法になれてにや、近頃の讀法は、一層みだりになりて、自他主賓の別をも立てずて讀むさへあれば、その直譯文の不正になれるは、尤の事なるべし、滿面不溢は古人は、みでれどもあぶれずと訓みたるを、今人は、みつれどもあぶれずと讀み、

實若虚も、古人は、みてれどもむなしきがごとしと讀みたるを、今人は、みつれどもむなしきがごとしと讀みて、みてれどもみつれも、同様の事と心得殊に、死字を、活字にする時の語尾につくるせし。するすれの語格は常によく誤りて愛せん、解せん、托せん、駁せんなどいふべきをも、みな愛さん、解さん、托さん、駁さんなど呼びなすより、その口癖は、やがて、直譯の筆にうつり、直譯の筆癖は國文の上にも傳はりて、國文學者と許されたる人だにも、今は、わいだめなく書きちらすさへあるは嘆かはしき事ならずや、先年、學友と、直譯文の事をかたらひし時、學友の漢洋の直譯文なりとてみせて、それを、また國文に直したるをもみせたる事あり、今、その文どもを、左にいだせり、朝に、夕に、かゝる詞遣に馴れては、口語にもいづべく、筆語にもあらはるべければ國文の、やう／＼にみだれなんはた宜ならずや、

支那文の直譯ぶり

哺乳獸は、骨骼堅實なるを以て、能く、陸上に行走し、水中を游泳す、而して、裸體の者、全く無きにはあらず、雖も、其大半は、身體を、毛を以て被ひ、苦くは、甲を以て被ふ、國文に直したるふり

哺乳獸は、骨かたければ陸にては走るべく、水にては遊ぶべし、また、稀には、裸體なるもあれど、多くは、身に、毛あるか甲あるものなり、

西洋文の直譯ぶり

亞細亞のあらゆる人民、それは、あらゆる世界の住民の、大抵、半分である所の四億である、それは、北、および南亞米利加の全き人を、一所にしたほど、さやうに多くの人民の九倍をもつ、

國文に直したるふり

亞細亞の人の數は、四億なれば、大抵、全世界の人の半分に、北亞米利加と南亞米利加との人をあはせたる數の九倍なり、

第二十二 形狀言のさときと

形狀言にて、あつさ、さむさなどいふべきを、熱き、寒きなどに紛らかし、また、とほき、ちかきなどいふべきを、遠き、近きなどに紛らかす事あり、あつさ、さむさの如く、さを添へていふは、孰も、その分量をいふ時の語にて、熱き、寒きの如く、きを添へていふは、ただその事をいふ時の語なるを、語の意をもきはめずして、分量をいふ語をもて、たゞ、

その事をいふ語に用ひたゞ、その事をいふ語をもて、分量をいふ語に用ふるなどは、あるまじき事ならずや、然れども、今の國文の書どもには傳寫などの誤りあるをも、その儘にて用ひたるもありて、語の學びに深くも、心をとめぬ人は、誤りたるには、心もつかで、古人も、かうざまにいへりとやうに、等閑に心得てにや、近頃、歌文の上に、このさときと誤れるどもの殊に多くみえしらがふはいかにぞや、源氏夕顔卷の、「こかしこ尋ねけるほどに、夜のあくるほどのひさしき、千夜をすぐさん心地したまふ」とある處のひさしきは異本には、ひさしとあり、こは、夜のあくるを待つ間の、久しく思はるゝ分量をいへる處なれば、異本に、ひさしとあるかた正しく、また、同書、神卷の、「春宮の御事のみぞ心ぐるしき、母宮をだに、おほやけざまにとおぼしおきてしを、世のうさにたへず、かくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ」とある處のうさは、異本には、うきとあり、こは、世のうき事にたへぬをいへる處なれば、異本に、うきとあるかた正しかるべし、歌などにも、この誤りあり、同書、朝顔卷の、「つれなさをむかしにこりぬ心こそ人のつらさにみへてつられ」とあるつれなさも、異本に、つれなきとあるに據るべし、こは、分量をいふところにはあらざるなり、

た。ま。ふ。 た。ま。へ。る。 た。ま。は。る。 た。ま。ふ。る。

たまふといふ語は、その語にありといふ意を含めていふ時には、たまへるといふは、^添そふを、^問そへるといひとふをとへるといふと同様に、常の事なれども、ふとして、賜へるといふべきを、賜はるといふ事あれば、心得おくべき事なり、賜はるといふ語は、伊勢物語、百段に、忘草を、忍草とやいふとて、いさせ給へりければ、たまはりてとも、源氏、桐壺卷に、源氏云々、ながはしよりおりて、舞踏したまふ左のつかさの御馬藏人所の應するて、たまはり給ふ御階のもとに、親王たち、上達部つらねて、祿ども、^なまなぐに、たまはり給ふともある如く、受くる如く、受くる方よりいはぬ語なるを、後世、殊に、近來は、賜はるも、賜へるも、區別なくて、假字列女傳などいふ物にも、魯の君、これをきこしめして、かの女に、卷緒百端、たまはりつゝ、その名を、義姑姉とぞよびたまへる、また、その弟をめしあげつゝ、黄金百鎰を、たまはり、卿の位になして、別に、蓋の國を治めしめ侍りけるとぞなどあれば、初學の人は、つとめて、かゝる書の誤謬をうけぬやうにせらるべし、また、たまふるといふ語は、その活用も、下二段にて、たまへる、たまはるとは、全く異なる語なれば、紛れぬやうにせらるべし、このたまふるは、中

古、自身のいふ語の尾につけて、人を敬ふ意にいふ語にて、今の人の、貴人に對する時のものいひに、存じ奉るなど、自身の語に奉るをつけて、その人を敬ふ意をあらはすと同様の事なるを、このたまふるも後世は、たまふたまへるなどと、互に紛らわしかし、あなたもてはなるべくやはとのたまへば、さてさぶらはんにつけても、物のみ悲しからんを思ひたまへれば、今この御はてなどすぐしてときこゆとある處のたまへれも、本居翁のたゞされたる異本には、たまふれとあれば、潮月抄本は、たまふれとありしを、たまへれに紛らわしたるか、または、もとより書損ありし本をとりしなるべし、こゝは、自身の語につけていへる處にて、たまふれといふべきところなり、序にいふ、この敬語のたまふは、自身の語につけていふ語なれども、すべての語にくるにはあらずで見ると聞くと思ふとの三語の外には、その例もなければ、行く、知る、取る、讀むなどいふ他の語には、つくまじきなり、これもまた心得おくべし、

第二十三 作文の題詞

作文の題詞に、何學校の記、新年を賀するの文、友人の故郷に歸るを送る序などやう

に書くは、近頃は、常の事になりたるを、こは、もと、支那文の題詞に、獨樂園、記、弔、古戰場、文、送、李愿、歸、盤谷、序などあるをみて、それにならひたるなれど、かくては、國文のふりに適はねば、國文に、志あらん人は、國文のふりを守りて、記、文、序などの文字は、すべて、詞といふ文字にかへて、何々の詞とやうに書かまほしき事なり、また、新年を賀するの文などいふ時の、文字は、支那文の讀癖より移りたる詞遣にて、正しき國文には、書かぬ例なり、その故は、この、文字は、梅の花、人の家などいふ時の、文字にて、語と語とのつなぎに用ふる辭なれば、人を教ふる道といふ時の、教ふるの如く、上よりの詞遣にて、文字なくとも、下の道の字などにつゞく時は、教ふるの、道の如く、の文字をそへてはいはぬ事なり、また、友人の故郷に歸るを送る序などいふ時の、送るなどいふ語は、送れると、れ、文字を添へてもいはるゝ語にて、かゝる處にては、正しくは、大抵送れると、れ、文字を添へていふべき處なり、その故は、送るとのみいふひかたは、不確實なるいひかたにて、時としては、いまだ送らぬ意にもなる故にて、さては、作者の心と相違すればなり、例へばこの國のならひ、旅にゆく人あれば、老幼男女、こぞりて送る、といへば、その送るは、その國の風俗の、さやうなるをいふにて、今現に、その人

を送るにはあらぬをいふにもなり、汝の歸る時は送る。といへば、その送るは未來の事を豫めいふ意にもなる故にいにしへの正しき物には、かゝる處は、友人の故郷に歸るを送れる文などの如くれ。文字を添へていへり、れ。文字を添ふれば、全現在となる故に、詞遣確實となりて、これかれに聞きなざる、事はなくなるなり、

第二十四 常によく誤る詞づかひ

人の常によく誤る詞づかひは疑問の語の下に、や。文字をつけていふ事なり、例へば、數を問ふに、その數は何程ありや。といひ、花を問ふに、その花は何の花なりや。といふ類の如し、すべて、何誰、何時何處、孰幾、如何などにつけて、いふ辭は、古書の上はいふも更なり、今日普通の口語にも、そこにあるは何か。そこに居るは誰か。かの人はいつ来るか。この道は、いつくの道か。などの如く、かをつけていふ事なるを、學校の教科本などいふ物には、そこにあるは何なりや。磁石は、いつかたを指すや。などの如く、やをつけたるが、數多みゆるは、檢定の時みおとされたるにや、審しき事なり、また、物事をするに、時をかくるを、時をつひやす。といひ、考案に、心をつかふを、腦をつひやす。といふは、當世の流行語なれど、當らぬ詞遣なり、費ゆ。といふは、物事の減るを

いひ費す。といふは、物事を減すをいふ語なれば、時を費す。といふときは、時を減す意となりて、時をかくる意にはあらず、腦を費す。といふ時は、腦を減す意となりて、心をつかふ意にはあらず、筆語にも、常によくいひいで書きいであるは、異様なるを好む今の世のさがにや、

また、獸類はけだもの。畜類はけもの。なる事は先輩の論もあり、古書の上にも明らかなるを、但し、和名抄には、獸畜の訓をとりちがへたれど、近來は、獸類畜類の區別もなく、うちまかせて、けもの。といふはいかにぞや、獸類畜類をもて、同一の物と心得ての事か、この頃いできたる或書には、雞はけもの。に驚くなど書きたるもあり、畜類とは、人家に畜ふ物にて、雞も、畜類すなはちけもの。なるを、さては、不思議なるいひやうならずや、序にいふ、獸類を、けだもの。といふは、毛津物。といふ義にて、畜類を、けもの。といふは、畜物。といふを約めていふ語なり、されば、正しき物には、鳥に對へていふには、すべて、けだもの。といひて、けもの。などいへるはなし、

また、小學讀本などに、に。文字。と。文字などを遣ひあやまりたる處おほし、例へば、松と雪とあるをいふとて、松に。雪。といひいひ、兄弟の遊ぶをいふとて、兄弟とあそぶ。とい

へる類なり、かく「松に」雪の如くいふ時は、松の上に、雪のつもりたるをいふ意となりて、雪を主人にしたる詞となれば松と雪との二品あるをいふにはならず、また「兄弟とあそぶ」の如くいふ時は、兄は主人となり、弟はその相手となりて遊ぶ意となりて兄も、弟も、互に、主人ともなり、相手ともなりて、諸共に遊ぶをいふにはならず、されば、かゝる處は、「松と雪」といひ、兄と弟とあそぶといはでは適はぬ處なり、さるに、また、「松と雪」の如くいふ時の下のと。文字をはぶきて「松と雪」の如くいふもあれど、これも、僻事なり、下のと。文字を省くときは時としては、下の語は、主人となり、上の語は、相手となりて、二語を、平等にいふ意にはならぬ事あり、さればにや、かゝる處のと。文字は、今日、常にいふ口語にも、自然に、「父と母と」「酒と肴と」「杖と杳と」「下駄と傘と」の如く、上にも、下にもつけていふ事なり、いひ試みてさとりるべし、

第二十五 明治の國語を定めたき事

國語は、いかにもして、一定にせまほしき事なり、今日、文に書く語は、大抵一定せるが如しと雖も、口にいふ語は、十返舎一九が東海道膝栗毛の如く、五十三驛さまぐに、て同一の事物を呼ぶにも、東國は西國と異にて、南方は北方と同じからず、東國、西國

の中にて、僅かに、數里を隔つれば、互に異同ありて、彼此の情の通せぬもあり、例へば父は、正しくはち。いふべき語なれど、大和邊にては、あんのうともいひ、越前邊にては、の。いともいひ、播磨邊にては、て。いともいひ、長崎邊にては、ちやんともいひ、佐賀邊にては、べつたうともいふ、また小兒は正しくは、こち。こといふべき語なれど、關東邊にては、ねんねともいひ、信濃邊にては、あかともいひ、奥羽邊にては、ぼことも。わらしともいひ、長崎邊にては、さ。まともいふ、猶、物類稱呼にのせたるを、一個二個いはば、

乞食は、正しくは、かたい、また、字音にて

武藏にては、こじき、マリ

下總にては、きらく

中國四國邊にては、ほいたう

京にては、ひでんじ、マ

長崎にては、やまばや、マ

人形は、正しくは、ひとがた、いふべき字音

上總にては、へいたう

筑紫にては、ごう

薩摩にては、せんもん

大坂にては、かいと

京にては、	そろま	東國にては、	のろま
中國にては、	できのぼう	豊前にては、	でくのぼう
豊後にては、	でこんぼう	四國にては、	てく、マ タで、コ
醉狂人は、 音にて(すゐきやう)といひ、常に(は、字)	よつまえひ、マ タ	大阪にては、	よたんぼ
東國にては、	どろぼう	薩摩にては、	よひぐるひ
遠江にては、	さんてつまごら		
唐津にては、			
汝は、 正しく(なんぢ)といふべきを、			
畿内にては、	あがみ、マ タおどれ	東國にては、	おぬし、マ タそなた
參河にては、	おのさ	出雲邊にては、	わかれ
上總にては、	にし	下總にては、	いし
津輕にては、	うが	對島にては、	こやつ
旅籠屋の下女を、			
京都邊にては、	はすは	東海道にては、	おじやれ

越後邊にては、しやく 伊勢邊にては、でにようぼう
美濃邊にては、もかひ 遠江邊にては、やぞう
信濃、輕井澤にては、おしやらく 相模、小田原にては、ばく

右の如く、一事物の名目も、國々所々にて變りたるに、津輕などにては、一月一日をも、大晦日オホソボリといふ年もありて、他所よりゆきたるものは、約束の日限などに、往々間違を生ずる事もありといふ、此等は、唯だ、その地の方言なりとして、差置くも、さる事ながら、文語の一定せるにくらべては、口語の亂雜なる餘りといへば甚しからずや、言には、古言もあり、また、音韻の變化をみるなどの用もありて、萬葉集などには、方言をもて詠みたる歌もあれば、一朝廢滅に至らしむるは、惜むべきが如くなれど、今の方言は、謎ナゾの如き喩ユメの如き語がちにて、夏の夕立雲を、坂東太郎、丹波太郎、信濃太郎、彦太郎などいふ類の、到底、その地の人ならでは會得しがたきも、多ければ、文語の、全國を通じて區別なきが如く、口語をも、各地方一様ならしめて、明治の國語を定めたき事なりかし、この國語を定むといふ事については、過年、假字會にても、評議ありし事にて、東京の普通語をもて基本とせんと論せしもあり、或は、江戸の昔の旗本語をもて、基

本語とせんと論せしもあり、或は、京都語こそ適當ならめと論せしもあり、或は、古言の正しきに復すべしと論せしもありて、最後には、東京、京都、昔時、今時の區域を立てず、新に、當時に適ふものにて、文語にも用ひらるゝものを撰定すべしといふ説いで、余が徒も、その説に賛同せし間、また、色川國士先生の演説を聞きて、余が徒は、ますます、最後の説の正確なるを信じ、また、その説を實行すべき標準を得たるを喜びたり、その演説の大意は最後の説の如くにて、その撰定の標準は、例へば、もし、同義の語にして、甲乙の二語あらば、その行はるゝ面積をかんがみて、その廣きを探るべし、その二語に、古今の別あらば、今を捨て、古を探るべし、また、その二語の古のは、面積せまく、今のは、面積ひろき時は、その廣狹を論せず、すべて、入りのふかきもの、即ち、古のを探るべし、これ語のふるきは、國のふるきを證し、語の久しきは、國の久しきを證する爲なりといはれたり、新奇を銜ひて、舊觀を失ふは、識者の、常に、當世に嘆ずる事にして、新奇を銜ひて、舊觀を失ふは、ひとり、物體の上のみには止らず、言語の如きは、殊に、歴史と相關鍵す、慎みて、また、慎まざるべからざるなり、

第二十六 本居翁の文話の一節

余、この雜誌の前號に、文をかゝんとする人は、その書かんとする文の時代と、同時代の言語を用ふるをよしとす、文脈は中古にて、その語は太古なるなどはいかゝあらん、況して、一文章中に、中古、近古の文脈をまじへ、漢文脈、洋文脈をもまじへたるなどは、いふも更なるべしとやうにいへりしを、その後、ふと本居翁のかゝれたる物をみしに、翁も、はやう、その事をいはれたり、その詞に、今の人の文は、時代のわきまへなくして、中昔のふりなる文に、奈良以前の詞も、をり／＼まじり、また、ふるきふりなる文に、むげに、近き世の詞も、まじりなどして、かの鳴くこゑ、ぬえに似たりとかいひて、むかしありけんけだもの、こゝちするぞ多かるといはれたるは、げにさる事ぞかし、この事につきては、猶いはまほしき事も多かれば、をりをまちて、またいふべし、

第二十七 常によく誤る詞づかひ

人の、常によく誤る詞づかひは、前號にもいへりしを、猶いへば、五十音圖、也行の上二段と下二段とに活用する語にて、ゆと書くべきを、ふと書く事なり、これは、支那文、殊に、詩などの訓にて、常に誤る事なれば、國文學者の誤るべきにはあらじとは、思ひの外にて、この頃、閑田耕筆をみしに、文中、そこゝに、榮ふる、聞ふるなど書けるがあり、

伴蒿蹊のさばかりの學匠だにかゝる讀癖にそめるを思へば世にはかくも書けりとやうに思へる人のなきにしもあらざるべければ心して正しく書きならふべし。老悔報などは、也行の上二段活用にて、老ゆ、悔ゆ、報ゆと書くべき語にて、老ふ、悔ふ、報ふとは書くまじき語なり、また嘶覺聞榮生、越費愈絶などは、也行の下二段活用にて、嘶ゆ、覺ゆ、聞ゆ、榮ゆ、生ゆ、越ゆ、費ゆ、愈ゆ、絶ゆと書くべき語にて、嘶ふ、覺ふ、聞ふ、榮ふ、生ふ、越ふ、費ふ、愈ふ、絶ふとは書くまじき語なれば、その語の活用をわいだめて、波行、也行の假字の區別を正しくすべし。

また論文などを書くに「その事はいざしらずなど書く人あり、こは清濁を誤りて、いさ」と書くべきを、いざと書きたるなれど、かゝる事も正しく書きならふべき事なり、いさは、否と同語にて、萬葉集に、不知をいさとよませたる意なり、またいかならんの意にもつかふ辭にて、玉葉集に、いさしらずこの世をうしといとひても、まだ何の身にならんとすらんなどよめるもそれなり、いざは、俗に、サア／＼などいふ如く、物事を催したつる辭にて、しらすなどいふ語の上に冠らせていふべき辭にはあらず、また、この頃、人のよく書く文詞にて、河内に、楠木正成てふ人あり、參河國に、八橋てふ

地ありなどの如く、てふといふ辭を用ふる事おほして、ふはといふを約めたる辭にて、正成てふ人ありは、正成といふ人ありの意、八橋てふ地ありは、八橋といふ地ありの意なれば、難もなきやうなるに、眞淵翁などは、てふちふとふ約めたる辭なり、などを、常の如く遣はれたる故に、その著書などをみる人は、それにならひて、中古風の文には、殊に多く用ふれど、實はみだりなる事なり、文にては、てふちふとふなどとは、いはずて、といふと正しく書くべき事なり、歌は、五七五七七など、辭句を限りてよむ事なれば、長語は、短語につゝめなどしてもよむ事なれど、文は、歌とは異にて、辭句に限りもなければ、いふべき丈は、正しくいふべきなるを、歌詞に耳なれてか、後世の國文には、約言をさへ、さながらに用ふる事あり、思ふに、後世の國文は、おほくは、歌人の書きたるものにて、それを、手本とするからにもやあらん。

又此頃は、演説の題、或は、論文の題などに、「方言について」「歌曲の詞について」など書く事なれど、之は、洋文直譯の筆法なるべし、國文の語法にてはいはぬ事なり、其故は、ついでといふ辭は、其事によりて、他事をいひ出る時の語にて、例へば、方言についてといふ時は、方言について、他の古言などといふ意となり、歌曲の詞についてといふ時

は歌曲の詞について他の文語などをいふ事となればなり。さるに今日の用法は「方言について」とは題しながら矢張方言の事をいひ、歌曲の詞について」とは題しながら矢張歌曲の詞の事をいふ意なれば。ついでに語法、いたく違へり思ふに、洋文にさる題辭の書きかたありて、それに用ひたるついでと譯すべき文字あらば、その文字は洋文にてはの意にて用ひたる者なるべし。の意の文字ならば聞ゆとすれば聞ゆる事あり、方言の「いへば」方言の説なりとも聞ゆべく、歌曲の詞の「いへば」歌曲の詞の論などにも聞ゆべし併しながら國文にては題辭などのかゝる處にては略筆は用ひずして、方言の説、歌曲の詞の論など、慥かに書くべき例なり。

また「何某といふ者あり」といふべきを「何某なる者あり」といふ事常におほしなり。といふ辭は、に。ある。を。約。め。て。い。ふ。辭。な。れ。ば、人。名。な。ど。に。つ。け。て。は。い。ふ。ま。じ。き。辭。な。る。を。支那文の直譯などには殊に多く用ふるは、あるまじき事なり。こはもと人名に近き語になるをそへたるが國文にもあるをみてふと思ひ誤りて、いひそめたるにて例へば、主佐日記に「船君なる人」といひ、源氏、帚木卷に「姊なる人」といひ、更科日記に「乳母なる人」といひ、宇治拾遺物語に「大隅守なる人」といひ、とりかへばやに「母なる人」とい

へるなどもあれば、正成なる者、高德なる者ともいふべしと思ひ誤れるなれど、なるはに。ある。を。約。め。た。る。辭。な。れ。ば、に。ある。に。て。聞。ゆ。る。處。な。ら。で。は。つ。く。ま。じ。き。辭。な。り。か。の。船。君。姊。乳。母。大。隅。守。母。な。ど。は。船。君。に。ある。人。姊。に。ある。人。乳。母。に。ある。人。大。隅。守。に。ある。人。母。に。ある。人。と。い。ひ。て。も。よ。く。聞。ゆ。べ。け。れ。ど、正成にある者、高德にある者などいひては聞ゆまじきなり。されば、支那文も、文選、白氏文集などのふるき傍訓には、名の傍に、トイフ、テヘルなどを添へたり、テヘルは、トイヘルを約めたる辭にて、古書の傍訓には常によく用ひたる辭なり。

第二十八 歴史の歌

歴代の事實を諳んせんには、歌に作りてくちすさむにしくはなし。歌には辭句に限りある爲に、長くいふべき事をも、節略していはるゝ、便利もあり、また辭句に、節奏ある爲に、諳誦もしやすし、さればにや學者、みづからも、その事實を忘れじとては、昔の人の事或は、故事などを、歌によみてくちすさむ事なり。もろこしの蒙求などいふ物も、著名の人物などを諳んせしめんとてなるべし、拙くこそあれ、余が世繼の歌を作りしも、その心ばへにて、かの歌を作れるほどは、武元氏の史鑑の題辭、生田氏の古

學二千文鹽谷氏の大統歌やうの書どもは、かたへさらず置きたりしを、生田氏の二千文は、神代にくはしくて、人皇以後におろそかなり、また、鹽谷氏の大統歌も、字數は二千字ばかりなるが、歷朝の御名をのせたるをもて、他は省略したる事おほし、唯だ、事實もおほく、詞つきもうるはしく思はれしは、史鑑の題辭なり、さるに、二千文と大統詞とは、はやう板行せられたれば、人のよくしれる物なれど、史鑑の題辭は、史鑑の首にそへたるのみにて、別に、板にしたる物もなければ、自然に、みる人もすくなかるべく思はるゝまゝに、左に、その題辭をうつしいでたり、日本歴史を讀まん人、この題辭を讀んじて、大勢の推移せし跡をもみるべく、かたへは、大家の、日本歴史をみし見識をも窺ふべし。

初編題辭

渾茫肇判、天七地五、滄溟四周、奄啓疆土、於皇神武、興自西偏、東征不享、定宅橿原、德配三器、天命罔忒、萬世之方、四基之極、漆々奕葉、八聖緝熙、靡弗壽考、皇圖式恢、克慎禋祀、時維崇神、廼止殉死、實由垂仁、景行命將于匡四國、赫赫武尊、戎夷率服、山川土田、民生既繁、廼疆廼理、成務是勤、熊襲弗茹、壅塞西路、仲哀斯殂、國步危懼、烈々神后、元老維翰、

鱗鱗踰海、于伐三韓、三韓既夷、聘貢不絕、經典博士、爰庭爰列、應神至聖、不顯其光、海內宗祀、永世不忘、鰥王孝友、菟道克讓、名數攸資、令聞令望、肫肫其仁、煙火維新、載修宮室、子來其民、天祐有德、三子更立、豈弟相承、民用和輯、安康不順、凶逆斯招、雄略禽荒、新羅弗朝、清寧無繼、求儲于野、億計弘計、成德懋軻、惜哉短祚、遺澤不延、武烈好刑、民生庸殘、應神之孫、實維繼體、遠繼祖武、德音靡悔、二庶受命、安閑宣化、欽明之時、蕃教始播、於戲禍源、既塞復流、尾與稻目、一薰一蕕、氛祲孔熾、國神斯怒、任那喪亂、震動我國、馬賊晦盲、佛寺爰興、敏達用明、寧莫之懲、太子之聖、何迷以蔽、醜厲是助、良臣廼殪、崇峻之禍、此日而冥、大逆弗討、已哉典刑、推古踐祚、乾坤易位、上宮秉政、佛教斯熾、舒明不辰、凶饑焉臻、胡克有救、梵唄紛紛、皇極齊明、牝雞再鳴、夷鹿僭亂、大命殆傾、天運往復、篤生賢哲、大兄藤公、南淵是結、凶賊伏誅、實由壯圖、穆穆孝德、賢佐良儲、近江之朝、有斐文物、取法于唐、百度秩秩、謀之不臧、喪師新羅、維虎生翼、滋賀永嗟、天武有子、舍人最著、持統于遊、棲棲徒御、文武孔昭、爰脩律令、用遏妖言、肇祀先聖、元明元正、坤德靡愆、有赫師尹、平城以堅、聖武淫佛、伽藍究力、金狄蠱蠱、蒼生蹙蹙、道場內設、中書醜聲、廣嗣忠憤、筑紫抗兵、孝謙重祚、廢帝荼毒、奸髡秉鈞、天位瀛瀛、湜湜百川、光仁大成、簡要爲治、宇宙復清、古昔尙質、

有闕史筆，微獻混焉。後世何述遺策，雖存元襍，維繁芟繁，摘要私紀以傳。

中編題辭

於昔桓武肇宅平安，奕奕宮闕秩秩市廛，基命既固，萬世不遷。三伐蝦夷，戒我師旅，矯矯虎臣，服茲醜虜。平城繼序，厥始純熙，大學育材，皇猷式恢。婦言是惑，廼生厲階，嵯峨令圖，友悌不渝。橘后有學，宮壺穆如，弘仁之治，典章維備。賢能在位，園人冬嗣，損上益下，克濟凶饑。何其早遜，使我永思，允文淳和，宜國宜家。良岑吉野，出入風議，夏野滋野，有述罔墜。維二上皇，德音不忘，恒貞顛沛，不失其常。仁明汰侈，淳風爰變，緒嗣老成，蚤陳所見。般若妙詮，胡救天譴，文德知賢。○駿着鞭，地利是重，首勸力田，篁也鳳鳴。安仁鴻漸，定也酣歌，信也阿諛。惟喬既退，良房廼登，世居外戚，子孫繩繩。幼冲天子，清和爲始，昊天憚怒，地震大水。柔嘉保則，兩備以蘇，夷虜率服，不勞師徒。基經立威，陽成斯廢，光孝踐祚，如芒在背。宇多龍潛，厥志既大，無爲而化。於古有光，永言絕唐，厥猶允臧。明明咨訪，爰得耆相，雄及季長，亦有令望。諄諄遺誠，醜醜盡思，讒言乃行，良弼是追。維三善氏，疊々策國，延喜之政，後世爲則。朱雀羸弱，民作亂麻，東有咆虎，西有驚蛇。邊將克力，蚤殄二賊，天曆好文，文士彬彬。江家菅氏，世有其人，實賴師輔。藤氏之良，爰爲嘉遜，時維高光，惜哉高明，不安其位。

冷泉狂病，幼主復繼，攝關是爭，猜々厥聲。於中書王，薨葬自營，圓融之朝，火烈草竊。華山既立，四海有截，義懷惟成，協心左右。黠哉道兼，乘間誑誘，三道相襲，伊周遠遷。金玉其相，維四納言一條愛才，才俊紛綸，中宮侍御，有斐淑媛，紫乃源語。清是枕草，鬚眉可耻，巾幗才漢，道長盈滿。望月無虧，女皆皇后，男列三台，實資砥柱。三條是賴，不幸喪明，太子亦廢。維後一條，民汔小休，刀伊之寇，隆家善謀。忠常之亂，賴信懷柔，噫後朱雀，天災熯熯。皇猷孔瘡，誰能救藥，永承之朝，夷虜無然。四方蹙蹙，居圉繹騷，勉勉賴義，初敗後威。奄戮鯨鯢，以靖邊塞，能信一言，開後三條。匡房侍讀，令聞孔昭，師房豹變，師實革面。經信資仲，維邦之彥，隆國三子，遂受寵眷。紀綱斯張，方國小康，如何上帝，降命不長。白河嚴峻，餘烈猶振，山徒煽亂，園城以燼。堀河既繼，院政是依，佛宮益盛，王室日衰。民窮國瘁，亂由茲起，我披青史，慨嘆曷已。

後編題辭

於乎白河，本源既濁，鳥羽承流，不清益黷。美福有寵，皇嗣斯易，保元閱牆，淪胥以溺。賴長寇兄，義朝殺父，彝倫既斁，百揆何敘。維後白河，小人易親，營院政，喪亂荐臻。信賴之禍，信西以亡，平治之功，平氏以興。二條無親，中書亦醜，皇綱如帶，幼冲相受。五歲上皇，八歲

太子相國跋扈耽耽虎視鹿谷狂謀以招震怒爰救爰匡壘々內府內府已歿誰遏逆威噫噫高倉仁聞何爲烏羽之幽天人具尤以仁之謀豈是私讎維源三位實爲嚆矢伊豆院宣遣孤以起關東諸源白旆中央木曾寇者厥聲煌煌水禽夜驚大軍敗衄火牛驅敵死傷埋谷右將何儒望風先逃少帝西狩遠涉波濤闔族奢華草露忽晡甲第連雲一旦燼灰婦言是用四宮踐祚搥鼓招禍釐下恟懼駸駸東騎馮河厲湖義仲倒行宜其伏誅平軍稍振固壁一谷關月照營梅花落簷飛將電擊驅軍峭嶸亂軍爭船舟指可掬忠度流芳知章就義重衡爲虜花方斯則戰艦凌濤如飛如翰旣陷屋島直迫長門檀浦洋洋平軍蹙蹙寶劍沒海冕旒魚腹教經勇戰知盛從容宗盛無耻傳臭坂東尺布可縫兄弟不容腰越一距讒口句句綸言翻覆朝制暮革二子奔亡所在搜索總追捕使實奪朝權守護地頭爰轉洪鈞旣吞奧羽鎌倉益固孜孜廣元霸圖是務孫謀弗臧羽翼是鍛婦翁老姦嗣子遭害秩父忠良荼毒旣傷和田倔強何亦速僵哀哉實朝身首異丘異哉公曉不仇所仇三世忽諸外家是遷陪臣執權襁褓將軍本院新院慍非一日承久之師何力量力二宮海島古所不聞誰其制之有悍尼君尼君賢姪時維武州載其恭儉遠邇懷柔時賴易主皇子乃東徼行巡察下情爰通湯湯滑川炬火照錢執政無私以利元元時宗

武毅再戮西使十萬胡元屍填玄海天潢二派皇統斯分東政始荒鬪狗猶々維後醍醐載懋載勵講事無禮蒙塵顛沛南枝可依櫻樹有字尊雲歷難吉野唱義義義千窟墨守斯全船上行在實因長年赤松蠹々賊徒崩角篠村反旗京師是復新田之功天誘其衷鎌都旣燼車駕還宮王政維新千載一時何其機務擾不見治武人咸怨茲雄得計昌言弗聽賢輔廼退褒逐宜舊驪殺申生親王幽死叛臣始橫兩將交疏羽檄爭飛官軍不利喋血京師足利西奔旣踣復起征討失機敗艦蔽海湊川決決忠臣斯殞三木一艸更凋已盡新帝爰立僞器是傳南山之駕脆脆僅安痛哉皇子暴骨北陸臥龍已死群蟻屠蜀結城之策海颶斯阻南陵遺恨以激幼主勉勉親房孤城乞援親朝降敵辱父背恩於戲小楠不負遺訓凜凜家聲潔死一戰師直淫虐快哉誅夷直義寇兄斃死亦宜叛臣無恒人心不一擾擾京師從復從失義興覆溺矢口顯靈武光血戰鎮西騁聲道誓立威非爲我忠正儀圖敵策無遺算義詮闇弱惑于道譽基氏知人薦賢輔孤善哉賴之懲諛舉直混一字內職由其力蒼蠅難拂獨臥清風明德奏功以令其終綿蠻黃鳥以和南北神器授受兵氣消息湜々今川九國以清義弘終反涇渭分明煌煌金閣有光乃祖極爵不壓受封明主義量蚤世義圓蓄髮持氏不軌鎌倉以滅三尺入道斫猿及君山名討賊壤地

并吞、東山侈靡、民財維斂、直純陳言、反遭斥逐、儲貳變動、實是禍胎、維婦之口、亦爲厲階、應仁大亂、乾坤板蕩、幕府斂手、強臣分黨、嗚呼義熙、天不假年、政元易主、義植逃奔、家臣弑逆、鞏亭遂廢、戰國基峙、海內羹佛、亂極而治、真主龍騰、昇平百年、文獻可徵、鯁生僭竊、妄修舊史、持論一家、龜鑑千載、

第二十九 假字づかひ

假字遣を正しくすべきはいふも更なれど、五十音の中にも伊呂波歌の中にも今日の口語にてはその音の呼びわけがたきもあるをもて、口語の發音によらんとする人もありて、その人は、假字遣をもて、全く無用の事とせり、先年、假字會にても、その論おこりて、古書によりて、正しく書かんといふ説と、口語の發音によりて、自由に書かんといふ説との二派にわかれたる事あり、また、或人は、その中間をとりて、新に簡易なる假字を定めんと論せしもあり、されど、新に、假字を定めんには、假令、簡易なるにもせよ、一定の法を立てざるべからず、一定の法を立つる時は、その法を教へざるべからずして、その教ふる新法は、將來には用ふべくとも、過去には及ぼすまじきまゝに、古文書を學ぶ者は、また、別に、その假字をも學ばざるべからざる事となりて、

同事を、二重にする不便もあれば、新定の説は、篤と考ふべき事なりとて、甲論乙駁の末、その論も遂に行はれずして止たる事あり、それに就いて思ふに、假字遣を、その人の考案によりて定むる事はいかゞあらん、定家卿の假字遣など稱して、詠歌者流の間に、一時行はれたりし假字遣もありしかども、契沖師の和字正濫鈔いでて、假字は、古書に因らざるべからずとて、後人の私には定むまじきを論せられたるより、世人も、定家假字遣の杜撰なるを悟りて、今は、全く、用ふるものなきにいたれり、されば、一個人の心をもて定めたる假字遣は、一時はしらす、終には行はるべくもあらねば、心あらん人は、勉めて、古書の正しきを守らまほしき事なり、また、口語の發音のまゝに自由に書かんといふ説は、當世めきて、便利なるが如くなれども、然る時は、古文を學ぶ者は、猶、別に、古文の假字を學ぶべき必要おこりて、矢張、これかれ二重の勞あれば、音便は、ともあれ、その他は、すべて、古書によるべき事なり、古書の假字を學びて、今文を書くことも、格別の煩勞にはあらず、世に、假字遣をむつかしく思ひとれる人もあれど、そは、大方は、假字遣を學びたる事なき人の、みづからの妄想にて、然か思ふなる事、余が常に、心にかけて試みたる事なれば、さる説に惑はずして、いかにも、古書によ

りて、その正しきを學ぶべき事なり、すべて、今様の論者は、何事も、舊様をわろしとして、びたぶるに、新説を銜ふ事をすなれど、新説は、經驗なければ、實事に、かくれば、思ひの外なる事あるなり、假へば、何某の説の如く、い。ゐ。え。ゑ。お。を。は。昔はしらす、今は呼びわくる人もなければ、その一個を廢すべしといふ時は、その論の、無用の數を省くに似て、一見識あるが如くも、聞ゆれども、さては、入。る。の。居。る。と。ま。が。ひ。撰。る。の。彫。る。と。ま。が。ふ。も。あ。れ。ど。い。ゐ。え。ゑ。は。假りに不可なしとすとも、お。を。の。ま。ぎ。れ。は。誤解をおこす事あるべし、古書どもには、祖母には、お。ば。と書き、伯母、叔母には、を。ば。と書き、祖父には、お。ぢ。と書き、伯父、叔父には、を。ぢ。と書き、て、お。を。の。二。文。字。を。も。て、父の父母と、父の兄弟姉妹とを區別したるなどもあれば、その假字遣を廢する時は、祖父をもて、伯父、叔父かと思はせ、祖母をもて、伯母、叔母かと思はするの類僻事も出來ぬべし、また何某の説の如く、九州人の外は、今は、大。抵。じ。ち。と。ず。づ。とは呼びわけねば、その一個は廢すべしといふ時は、議院などの多數に依る例もありて、これも、一理あるが如く、聞ゆれども、然る時は、九州人は、これまで呼びわけたる、ヒナハシ 櫃耻と、クズシ 葛屑との呼びわけを改めざるべからず、もし改めずして、假字のみを一樣ならしむる時は、他州人との往復はしら

ず、九州同士にては、櫃も、耻に聞きなされ、葛も、屑に聞きなさるゝ、事なきにあらで、甚しき誤謬を引起す事あるべし、殊に、音の清濁は、國々所々に因りて一樣ならず、或地方は、清音に呼ぶも、或地方は、濁音に呼ぶもあり、或地方は、甲語を、清音に呼び、乙語を、濁音に呼ぶを、或地方は、かへさまに、甲語を、濁音に呼び、乙語を、清音に呼ぶなどもあり、語毎に、その定にて、千言萬語、かぎりもなければ、到底、その論も、實際には行はるべきにはあらねど、何事につけても、新奇をきほふ世のさがとて、今は、學問の上にも、この風潮を傳へたれば、ひとり、假字遣のみには、止らず、山に、船を乗らんとする類の珍説奇論も、涌きいづべければ、初學の人、つとめて、一時の流行に惑はさるゝ、事なかれ、

第三十 國文を習ふ人の心得

國語とは、本邦の語、國文とは、本邦の文といふ義にて、古言、古文といふ義にはあらねど、また、今言、今文といふ義にもあらねば、古今を折衷して、その宜しきを撰ぶべきは、その間に、自然に定りたるが如し、されば、その自然に定りたる宜しきを撰ぶといふは如何といふに、古言にも、俗なるあり、今言にも、雅なるあり、古文にも、いやしきあり、今文にも、めでたきあれば、俗なるといやしきとは捨て、雅なるとめでたきとを取

るべきはいふも更なれど、初學の人の文を習ふはじめは、言語を撰び文體を撰ぶよりも、先づ筆のはたらきを自由ならしむべし、余が多年の経験よりいへば、今言をもて、今文を書き習ふをよしとす。こゝに、今言、今文といふは、今人朝夕の口語を綴るもの、いはゆる言文一致體の文をいふ、言文一致體の文は、日常の口語の文字にあらはるゝものなれば、學ぶに足らぬが如くなれども、然らず、口語は消えて跡なきが爲に、重複も隠れ、間違も見えずと雖も、文字に寫す時は、重複もあらはれ、間違もみゆるをもて、同語の再三來るを避けて、時をとゝのへ、自他を明らかにするなど、容易なる事にあらず、然れども、古言、古文にくらぶる時は、兎も角も、今日の事なるをもて、悟り易く、書き易きはいふも更なれば、余は、文を習ふ最初には、まづ、今文を書き習ふをよしとはいふなり、今文に因りて、種々の法則をおぼえて、後古文に入れば、古文も、また自由になるゝものなり、これ、今人の耳に近きものよりして、今人の耳に遠きものに及ぼす方法にて、かの高きに登るに、卑きよりすとかいふ順序にも適ひて、きはめてよき方法なりと思へり、先年、或人、古言、雅言を悟らしむるに、新工夫を用ひて、古言を教ふる時には、今言を示して、それに當る古言を教へ、雅言を教ふる時には、俗言、方言

などを示して、それに當る雅言を教へたる事あり、これ、余が、今文より古文に入るべしといふと、同一の考案にて、余は、今日も、時としては、古文を書く前に、まづ、今文を書く事あり、こゝは、種々混雜せる事を書くには、直に、古文を用ふる時は、書きなやむ事ありて、添削などに、多くの時のかゝるをもて、最初は、まづ、今文をもて、口語のまゝに、自由により書きおきて、さて後に、古文に直す時は、勞すくなくして、功おほきが故なり、また、余は、常に、人に語るに、文は、心をもて作りて、筆をもて作るべからずといへり、その故は、筆は、心裡の文を寫し、いたす道具なるをもて、もし、書くべき事あらば、心の中に、その文を作りて、さて後に、その作りたる文を、筆をもて寫し、いたすべし、筆をくはへて、辭句を案する癖をつくる時は、考案の間、種々の妄想おこりて、制しがたくなるものなり、されば、初學の時、つとめて、この心中作文の習慣をつくべき事なり、また、文を作るには、つとめて、短文より作りならふべし、辭のくばり、句のおきやうなどは、長文よりも、短文の方おぼえやすくして、短文にておぼえたる、辭の句ばり、句のおきやうは、長文にても異なる事なければ、長文も、自然に出來ることとなるものなり、また、作文の題は、雪月花のたぐひの風雅なる題は避けて、日常の事、たとへば、人と人との話

のところ、或は問答のところ、または事物の解釋などを書きならふべし、これ雪月花のたぐひ、風雅なる題をわろしとのみいふにはあらねど、さる題をまうぐる時は、自然に、古人の作例を求むる心となり、作例を求むれば、また自然に、古人の句調を學ぶ心になりて、考案よりさきに語を尋ねてのち、考案を定むといふが如き順序の顛倒する癖を生ずればなり、かの歌に、言外餘韻といふ事あるが如く、文には、文字の外に、一種の氣象のあらはるべきものなれど、その氣象は、擬古の文にはあらはれずして、自家の眞率なる文にあらはるゝものなれば、初學の間は、まづ、擬古の文は避くるやうにせまほしき事なり、

第三十一 筆のはたらきたる文

いぬる頃、俳諧文の筆の力ありて、面しろく見はれたるを、數十篇うつしおきたり、俳諧文なるをもて、筆のはたらけるには、あらず、筆のはたらきは、その人の心のはたらきにて、その人もし、雅文をかゝば、そのはたらきは、雅文の上にもあらはるべきはいふも、更にて、作文の手法には、こゆなくおぼゆるまゝに、筆のついでに、試みに、まづ、その一二篇を示すべし、

化物論

世に、化物といふ物ありて、多くは、女となり、兒とあらはれ、大坊主の取沙汰は、きけど、月代サカヤキそりたるは、終にきかず、夜ヨルばかりいづるは、いかなる故ぞと、或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて、煩しさよと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき、臆病者を相手にとれば、その藝、ことに出来ばえして、武功の人にいであはすれば、思ひの外、のあやまちをかうむる、鬼は、伯母にばけて、かひなをとりかへし、狐は、叔父に化けて、畏おその異見をいふ、誠に、鬼が伯藏主になり、狐が伯母にばけたらんは、その姿おかしからじ、これらや、正風自然の本姿なるべきをや、まづは、狐狸のなすわざに落ちて、猫また、河童は、たまゝの沙汰なれども、その正體の穿鑿は、樂屋のみえておもしろからず、たゞ、理屈なき、化物といふものこそ、殊にゆかしけれ、そも、神は湯立にもうつらせたまひ、佛は、稱名に來迎なるを、此化物は、百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にも、のせられず、訓蒙圖彙の筆にも、およばず、たゞ、赤表紙の小雙紙に、はづかしき姿は、とゞめられける、さるに、昔今の美婦國色すら、身の終は、みぐるしく、關守におちぶれ、檜垣にさまよひ、または、猿

澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相のみた
てもうるさきに、たゞこの物の終ばかり、引幕の陰をもたのます、あとに、箒も、雜巾
もいらす、かきけすやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ、

山水譜

凡そ、山水をゑがくに法あり、一丈の山には、一尺の樹、一寸の馬には、豆ほどの人な
るべし、遠人には、目鼻をかゝず、遠樹には、枝なし、遠水、波なくして、雲とひとしかる
べし、岩に、三面をみせて、道には、二つの岐あるべし、すべて、畫は、遠近をしるを第一
とす、遠山、ちかき山とつらならず、遠水、ちかき水とまじはらず、林木、遠きものは疎
平にして、近きものは、高密なるべし、葉あるものは、枝やはらかに、葉なきものは、か
たし、土に生ずる時は、なほ、石に生ずるものは、まがれり、古木は、節おほくして、半
は死をかくべし、四時の變化を案し、山の淺深をしるべし、山谷樹ふかき所には、寺、
觀樓閣のやねをかさね、水郷山店の間には、酒旗の青白をひるがへすべし、これ、王
摩詰が山水の賦の法式なるべし、やまと山水とて、かはりあらず、されど、城ある所
には、天守をそびやかし、神社ある地には、鳥居をかくべし、山石、水木ともにやはら

かに、櫻は白妙に、和松は緑にして、これ、和漢各別の沙汰なるべし、富士は下野なが
く、景おほやうにかくべし、松島は、あやしくたへに、景すゞしかるべし、象潟は景を
のこしてあはれに、九世戸は、景等分にして、麗しかるべし、須磨、明石は、あはれにさ
びしく、吉野、龍田は、はなやかにさびし、住吉は、神さびて面しろく、泊瀬は、むかしな
つかしかるべし、六玉川、近江八景、風雅の上をもてしるべし、唐の僧、和の江湖をみ
ていへる事あり、これ、唐の西湖に十倍せりと、唐畫、西湖を寫して、帆ある舟をはし
らす、唐の西湖は、水あさくして、人の溺るゝ湖にあらず、たゞ、遊人の舟のみといへ
り、世上に、洛中、洛外の繪とて、切實、想金おきちらし、丹青鮮かにいろどり、黃白、細微
に文をなす、奴の頬髭に、墨を點じ、傾城の唇に、丹をふくむ、これ、その遠近をしらざ
るものなり、假令、丹青はぬるとも、洛中、洛外の景色は、全く、山水の部に、して、遠人の
格式なるべし、すべて、畫圖をよくせんものは、まづ、風雅をしるべし、古人、畫中の詩、
詩中の畫といふは、この所なるをや、世に料理するもの、魚鳥を切る事をしりて、喰
ふ事をしらず、畫工は、ゑがく事をしりて、面しろき事をしらず、されば、面しろき事
をしらずして、面しろき事をかゝざるは、何の面しろき事あらんや、

旅賦

春は乗りかけの鈴なりて、浴衣染の花やかなるは、參宮の都道者か、夏は、さみたれのかきたれて、金谷島田に、大名の市をなし、秋は、木曾路の木々も、紅葉して、猿三聲の涙、ひとり行脚の頭陀をうるほし、冬は、鈴鹿のふゞきに、飛脚の足を定めかねたる、いづれもとりの哀なるべし、五十三次の紀行は、あまねく、人のいひふるせど、多くは、歌よみ連歌師のぬめりに、佐夜の中山に、旅寐の詞をつゞけ、宇津の山邊の蔦にまとはりて、十圍子のさびしさはしらず、さらねば、寺社舊跡の由來書、みちのり、方角の詮義におちて、猶誹諧にひろふべきものはのこれり、許六が賦に、馬方の境界をつくし、木導か説に、出女の盛衰を述べたり、しひて、そのまねびせんとにはあらねど、例の腹ふくる、わざなればならし、旅の哀といへば、西行の笠しめつけ、宗祇の草鞋の跡を思へど、大名の往來とても、たとひ、煙草盆の銀かなもの、はかがやけど、竟日の駕籠に、足をいため、緞子の夜着に、雨もりを聞くも、旅ならずしては、いかでかは、いでや本陣の夕ぐれは、立砂に、幕をひるがへし、すそする馬のしりをならべ、亭主が髪はそ、げながら、上下に、泥足をす、ぎて、塗臺に、小鯛のはねま

はりたるは、さすがに、草枕とはいひがたかるべし、下宿のさまは、引きおとりて、みせさきに、居風呂ふすぼり、小ぐらき行灯の陰とりまはして、ねころぶ者は、木枕に、虱をつぶし、また寐ぬものは、とりかへ錢の勘定にの、しる、人よぶ手拍子のならぬこそ、殊にわびしけれ、月おち、馬いな、き、草鞋うり、焼酎うり、按摩けんひきの聲もをさまりて、のち、拍子木丁々として、これらは、いかめしき旅の一體なり、すべて、旅籠屋の庭の氣色は、蘇鐵つくり、松うゑぬはなし、畑畔には、山水をしかけ、大磯、小田原には、小石をまきちらす、塀に、しのびがへしはありながら、土戸のかけがねはひずみてか、らず、湯殿は、無性にひろくて、晝鼠をまよはし、雪隠の壘は、座敷よりつらなりて、張付の裏梅もあらぬ匂ひに破れか、り、蟬の啼くこそ、哀なれ、膳には、いなだの鰯かすかに、鯉の焼物、大根葉のあへ物、壺皿の豆腐に、きざみ昆布の味ひもおぼつかなく、箸のふときは、幾度も削り直さんとにや、いとうるさし、出女を、赤前垂とは、都の近き名のみなるべし、宵は、返辭の尻輕に、たちまはり、鼻歌に、雨戸はしらかすも、今宵いかなるさ、やぎの橋をかけたる契もとこそ、ゆかしけれ、沓、草鞋笠の雙甲は、ゆく先々の店につるし、あやしのはなれ屋には、竹につけて、道ばた

にもいませり、赤表紙の道中記、おもりに、鐵鍔をさげ、櫃のぼた餅には、煤黒き雜巾をおほふ、箱根の赤腹は、卷葉にさし、梅澤の鮫鱈は、鍵にかけて、軒につるす、されば、日より、天道次第ながら、さしも、大井川は、膝だけにこして、思はぬ酒匂に、二日とめられたる、あら居の茶屋に、うなぎのあたらしき日は、親の精進にあたりて、ひしげたる小家に、日ごしの焼餅を喰ふなど、昨は、絹賣に道づれして、大濱に、溫飩をふるまはれ、今日は、脱參ヌケマシの介抱して、天龍の河風に、あたらしき笠をとられたる、哀樂、日々に移りかはりて、幸と不幸は、首途の吉日にもよらぬなるべし、旅に、哀をしるとは、その行客の身の上のみにあらず、駕かる人は、かく人の達者をうらやめども、駕かく人は、かる人の錢をうらやむ、小揚のあひことばは、いつの世よりの洒落ならんや、みけん事は、三十五文にして、またと坂東とは、二十八文なるべし、朝は、鳥羽の早追にはしり、晩は、姫路の女中をつりて、身は、定めなきむらしぐれ、雲助の行末もいと心もとなし、疝氣だまの河越の首に、髭奴のまたがりて、及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬方の、座當のせて、くらがり峠こすも、いづれ、世わたりの悲しからぬかは、それが中にも、口のすぎたる船頭は、大坂〇にた、かれ、鼻のおちたる

餅屋は、六十六部にさへきたなまれぬ、誠に、一生涯のありさま、觀すれば、みな旅にして世を旅の空にたとへたるは、假の住居といふのみにあらず、樂しみも、苦しみも行先に見つくして、たとひ、女院の六道の沙汰とても、これにもれざるべし、たゞ、誹諧師のなるは、てのみぞ、棄恩人無爲のしめしも、またず、ふつゝ、かに、天窓まるめて、吉野初瀬の春をゆかしみ、松島象潟の浪にうかれまはり、三文ねざりて、戻馬にはくれ、乗合なくて、渡舟もいだし、誰が爲ならぬ雨にもぬれ、月にも道のりをつもりちがへて、きのどくの山陰に、一夜は、一家ヒトケの情をかりて、薄をりたく、圍爐裏ばたに、膝皿あぶりながら、蟲齒やむ子に、まじなひをしへて、稗團子のもてなしにあふ、或は、しるべの古寺をたづねれば、和尚は、漢和もすこしなりて、足のぬけたる碁盤になぐさみ、五六日の名残ををしまれて、松茸に喰ひあきたるなど、水雲萬里をうかれありきて、ほだしなき身のやすさながら、その下人を孫平とは、我が伯母聲の名なるものと、ふと、故郷の戀しき折もあるべし、仕官十年の間、木曾路、東海道の、くりことながらのふれば、行程千四十里ばかり、猶ながらへて、いかばかりの旅、旅行もしらねど、今年は、齒も、四十の老ちかく、しきりに、懷舊感慨の情に、忍びず、旅

の賦、一章をかきて、寓居の氣をつひやすも、まことはあぢきなきすさびなるべし。

第三十二 歌の上の事

賛成員諸君より、歌の上の事、これかれと問はれし中に、今様歌の事につきて、余が、今様の歌も、古歌の如く、心と、しらべと、すがたと具へではあるべからず、近頃の軍歌唱歌のごとき、心もなく、調もなく、姿もなきは、歌にはあらずといへりし事ありしを、この頃、また、その今様歌にも具ふべしといふ心、調、姿とはいかなる心、いかなる調、いかなる姿ぞと問はるゝ人、これかれありて、殊に、國學院雜誌にのせて委しくいへとさへいはるゝ人、出來たれり、されど、かゝる事は、しる人は、おのづからしる事にて、余がめつらしげにいひでんも、いかにぞや思はれて、かたへは、面あかむ心地もすなるに、まして、古調の歌は、思ふよしもありて、年ひさしくよみもせず、論じもせずであるをと思へど、學友さへに、すべなくしひらるるに、今は、默止もえあらねば、父の、むかし、門人等の間に答へられし趣を書きいでゝ、その責を塞ぐになん、この父の説は、歌學新論といふ物にも、のせたれど、聊かつゝ異なるふしのなきにしもあらねば、新論とも見合せらるべし、また、その新論の序は、余が書きたるにて、余がおほよその説は、そ

の序にてもしらるべければ、今は、まづ、その序より書きいづべし、

第三十三 歌學新論の序

およそ、物事には、深きと淺きと遠きと近きとありて、深きを、淺きにくらぶれば、深きは、淺きよりもかたく、近きは、遠きよりもやすし、されど、その物事によりては、たゞ、さのみにもあらずて、深きは、淺きよりもやすく、近きは、遠きよりもかたきもあるべし、かの畫の道の物がたりにも、人のおよばぬ蓬萊山のけしき、荒海のいかれる魚のすがた、唐山のはげしき、獸のかたち、地獄の鬼の顔などは、たはやすからぬやうにはあれど、實には似すとて、とがむべき様もなければ、さてありぬべきを、世の常の、山のたすまひ、水のながれ、目にちかき、人の家居のさま、籬の内など、心ことに、しづかにかきいでん事は、上手ならではえせずとぞいふなる、手も、唐文字の扁つくりの、こちこちしきよりも、ふとみては、何ばかりかはとは、みゆるものから、假字の手の、たをゝとなよゝ、かなるふしを、やはらびてかきいでん事は、こよなうかたしとぞ聞くなる、歌は、また、殊に、その定なるべし、されど、そのかたきふしをよみいでゝは、歌の心とする、嘆きの心はいでまうでくまじうこそ、さるに、かのゑと手とは、目をもてみて、手

をもてかけば、かたへは、なほ、心のよすがもありぬべきを、歌は、心ひとつの榮なれば、ともすれば、深く遠くまよひいりて、あらぬ意をふくめ、さらぬ思ひをかまへて、ことわり妙によみいでんとするは、もとの心をうしなへるにあらずやは、さるは、この新論よ、大人の、まだ世にいまそかりしほど、はやう、教子のためにとて、くはしとはあらねど、そのかたきふしを、やすらかによみいでよとてか、れしものなるを、この頃、ふとみいでしまゝに、同じ心にみるらん人もあるべしとて、高見が、この一言をそへて、かくは、るり巻にはせさせしなり、

第三十四 歌の心の事

歌には、歌の心といふあり、さるは、歌には、ふるくもあたらしくも、いかにもあれ、心のなき歌といふはあらぬを、こゝに、殊に、歌の心といふは、實に、さる心あればなり、それは、古今の歌は、大概、この歌の心をよめるを、後撰、拾遺になりては、やゝ、詞のかざりに流れて、この心を失ひ、まして、千載、新古今にいたりては、大概、この歌の心をよめるは、なく、たゞ詞をかざりて、あらぬふしを、うべくしういひつゞけたるなれば、多くは、いつはりなるはいふも更なり、その中に、この歌の心を得てよめるにやとおぼしき

ありても、それも、その心はやう、古人の考へたる趣をとりたるにて、さては、あらたによめるかひもなければ、詞のかざりをあらためて、めづらしげに作れる物にて、全くおのれが心にあらたに思ひ得たりとみゆるふしのあるは、をさくなし、されば、この千載、新古今を、古今にくらべみて、今いふ歌の心の大概をしるべく、いとせめていふ時は、古今と、ても、悉く、歌の心を得たるには、あらず、それは、貫之ぬし、躬恒ぬしなどの殊によくよまれたる歌どもを、選りいで、その心の思へるやうを考へて、さとるべき事なり、すべて、歌は、たゞ、眞心に、ひたぶるに思ひいりて、よむべきなり、さやうにして、よむ時は、おのづから、理なきやうなる事もよまるれど、それ、實に、理のなきには、あらず、その理、ふかく妙にして、きはめがたきにより、理なきが如くなるなり、これ、すなはち、歌の心とする心なり、されば、歌は、必ず、理をきはめてよむ物には、あらず、たゞし、これは、歌の心の上をいふなり、さて、さやうに、心には、理をきはめては、よむべからねども、詞の上には、その心の、必ず、よくきゝわかれんやうに、理をきはめてよむべきなり、これ、すなはち、互爾、平波、語格の、さだまりありて、それを守らでは、えあるべからぬ所なり、はやう物しつる、辭格考などは、たやすからぬわざのやうに、世にいふ人も

ありとかきけど、それは、もと定まれる格ありての事なれば、物にもあらぬを、たゞ、この歌の心を得るは、物により、事にふれて、その打思へる所に、おのづからの定まりある、それをみつけてさとりわざなれば、そのわざはめてかたし、さるは學問にもよらず、たゞ、この歌の心をもたる人は、おのづからもしり、この歌の心もたらぬ人は、學問すとも、さとり事かたかるべし、猶歌の上の事ども、とりたて、いはば、いくらもあるべけれど、その中に、むねと心得べき事、一事あり、それは、心のあやと詞のあやとの事なり、心のあやとは、心に、あはれとおぼゆるふしあるをいひ、詞のあやとは、詞に、おかしと聞くべき所のあるをいふ、抑も、歌は、思ふふしある時によむ物なれば、その思ふまゝ、をよめば、その思ふふしやがて、心のあやとなりて、あはれとおぼゆる歌いにくるなり、これ、まことの歌なり、されば、思ふふしなき時は、もとより、歌はよむべきにあらぬを、歌よむ事を、やくのやうにしたりし世の人、これを心得ひがめて、しひて、歌よまんとせしまゝに、その思ふふしもなき心を、そのまゝに、いひつゞけては、かのあはれと聞くべきふしなく、たゞことのやうになるからに、せめてのわざに、詞の上にあやをまうくる事をはじめにし、後には、かへりて、それをのみ、たけき事のやうにし

てよみくする事となりたり、さるは、歌といふ物の、もとの心は、ふつに忘れたるにて、さやうによむは、よむにはあらず、いつはりて作るなり、このけぢめは、あがりし世の歌と、くだれる世の歌とをくらべてしるべきなり、されば、歌は、心のあやを、先とすべく、詞のあやは、次とすべし、心のあやとは、一首の趣向なり、詞のあやとは、縁語などのつゞけがらをいふなり、すべて、歌は、いつはりかざらずして、實情を述べべき物なる事は、誰もしりたれども、深く思ひ入らぬ人は、たゞ、ともかくも、打思ふまゝ、をよむ外はあらじと思へり、さるは、わざとめづらしからんやうにと構へて、あらぬたくみをまうけひがくしき偽りをいひいでんよりは、よろしくもあるべけれど、それを、歌の極意と思はんは、委しからぬにて、僻事なり、抑も、歌は、心に感ずる事ありても、だはいえあらぬ時によむ物にて、その感ずる事を、ありのまゝの詞に、いひつゞければ、その感じたる事やがて、心のあやとなり、そのありのまゝの詞、すなはち、聲コエの調シラベをなして、おのづから、歌とはなるなり、されば、歌は、心に、歌とよむべきあやあり、聲に、歌とうたふべき調ありて、はじめて、よみもうたひもしつゞけて、歌とはいふべき物に、なん、然るに、この心のあや、聲の調を心得ずして、たゞ打思ふまゝ、を述べて、偽れるふ

しなければとて、さのみ思ひかためんは僻事なり、そは、たゞ、三十一字にて、事を述べたる物にて、實は、歌にはあらぬなり、後世の歌の、古に及ばざるは、この心のあや、聲の調をうしなへるからなり、そは、まづ、心のあやを失ひて、次に、聲の調を失ふなり、さるは、心のあやなくなれば、詞のあやを求めずはあられず、詞のあやを求むれば、ありのまゝの詞にはつゞけがたし、ありのまゝの詞につゞけがたければ、こゝ、やかしこや、詞を入れかへなどするにより、調くだけで、打誦しても、感哀の聲なく、まして、また、心のあやなければ、調は調ときこえても、あはれと感すべき所なく、畢竟、三十一字にて物の理をことはり、事のさまを述べたるのみの物になるなり、これは、歌の調の事に、これにも、深く心得べき事あれども、それは、次々にしるしいづべし、この條々の論説にて、歌の心の事は、大概さとり得つべくなん。

第三十五 しらべの事

歌は、うたふ物なれば、調を、むねとすといふ事は、誰も、常いふ事なれど、それは、たゞ、大方の事にこそあれ、その調の中にも、眞の詞のあるを、かの歌の心を失ひて、縁語をもてつくりかざる事を、たけきわざにして、さやうにのみよみならひて、世々ひさしく

なりぬれば、今は、この眞の調を聞きしる人を、さく／＼なくなりぬ、さるは、歌は、うたひてきく物にて、聲のしらべをしるは、耳にあり、まことに、歌は、耳の物なるを、かの調のかざりをのみ、むねとしてよむ、今の世の人どもは、これを、目の物にして、歌だによめば、文字にかき、文字にかけば、目にてみるなり、さて、目にみて考ふる所にては、一文字一文字も、その理にかなふやうにする事、おのづからあるべけれど、かくするによりて、調といふ物のある事は、ふつと忘れもてきたり、まして、眞の調をや、かの萬葉の「昔さすむらさき野ゆきしめ野ゆき野守はみずや君が袖ふる」といふ歌は、理のまゝに「君が袖ふる野守はみずや」といふべきなるを、さては、調くだる故に、うちかへして「野守はみずや君が袖ふる」とはいへるなり、また、新古今の「はらひかねさこそは露のしげからめやどるは月の袖のせばき」といふ歌も、理のまゝには、月のやどるか袖のせばき」とか、または、袖のせばきに月のやどるか」といふべきなるを、さては、調くだくる故に、かくうちかへしていへるなり、さて、この二首も、君が袖ふる野守はみずや」といひ、袖のせばきに月のやどるかなどあらば、それは、三十一字の文なり、歌にはあらず、これにて、調を心得べし、猶いはば、たとへば、客人にあるじせんと思ふ時に、童

などに「盃もてこ」といふ事もあるべく、また「もてこ、盃」といふ事もあらんを、それは、その時の思ひのおだやかなるといらだゝるゝのけぢめによりて然るにて、「盃もてこ」も、「もてこ、盃」もはじめより、然かいはんとも思はぬに、おのづから然かいはるゝにて、調も、心よりいづる事をさとりべし、これ、眞の調なり。

第三十六 すがたの事

歌のすがたはさまぐに、て、高きもあり、卑しきもあり、今思ふに、古今の「奥山の岩垣紅葉ちりぬべして」る日のひかりみる時なくて」とあるは、古今の中に、たゞ一首あるしらべのくだけたる歌なり、これを「てる日のひかりみる時もなく」などあらば、調はとゝのひて聞ゆめるを、さはいはざるをもて、すがたの大事なる事をさとるべし、この歌奥山の云々といひつゞけたる詞のさま、詞のいきほひを思へば、まことに、「みる時なくて」とあるべく、「みる時もなく」などはいふまじき所なり、されば、この歌は調をすて、姿を^{スガタ}たてたりといふべき物なり、但し、こゝにいふ調は、おほかたの調をもていふにて、實は、この「みる時なくて」は眞のしらべなり、

○作用言、形狀言を承くる互爾乎波

作用言いふの形狀言いふは、その活用の節によりて、然連用、連體、截斷、已然、
など、いふ節、續きもし、切れもする如く、また、その節によりて、互爾乎波に、承くるもの
と承けぬものとある事は、國文に、志ある人は、大方しる事なれど、初學のほどは、猶心
ともなくたどらるゝもあるべく、殊に、近頃は、新奇を好む世のさがとて、故さらに、異
やうなる詞遣をもて、古の正しき格をみださんとするさへあらば、爰に、古書に徴
して、その活用の節を承くる互爾乎波どものあらましを示すべし、然れども、ずで、
ぬなどいふ互爾乎波は將來を承くるもの、めり、らん、らし、まじなどいふ互爾乎波は
截斷終止を承くるものとやうに覺えんは、覺えにくきやうなれば、余は、先年、兒童
の爲にとて、その將然、連用、連體、截斷、已然の五節を承くる互爾乎波どもを、歌によみ
たる事あり、

その歌

第一 文の筋を承くる。豆爾平波なり。その節は、
 シヤウゼン 將然はば、やなんまし、すでぬめんざりざるとねばとなりけり。
 レンヨウ 連用はつぬなんししかでけりたりにきにしきついできにけんば。

將然の歌のざり、ざるに、は、ざら、ざれもこもり、運用の歌のつゝねには、づる
 つれのぬるぬれもころり、けれたら、たろ、たれもこく
 連體の歌のなり、に、は、なら、なるなれもこり、截斷の歌のなり、なるに、は、
 なら、なれもこり、めり、めるに、は、めれもこり、べし、まじに、は、べき、べく、
 へ、けれ、まじき、まじく、まじけるなどのもれるなりとしるべし。

な上
が代
らの
に物
てに
は、も、
語、傳
格寫
違の
と誤
看り
倣な
さど
ろも
いあ
もり
のて、
もさ

しをわきまふべし。

なり、善事は小なりともよくつとむるべし、惡事は小なりともなすべからず。

つまされは、大をなす事なし、よく人のいふ事なれどもちひさきをわきまふものなし、

「たとひ主従の約ありとも、大方にめぐみては、誠に辱しと思はじ、その惠も、凡の人よき事をば忘れて、わろき事をば、深く思ふものなり、然れば、一度よきとて、いつまでも忘れまじきと思ふはおろかなり、こゝをよく心得べし、

「人、まことなる時は、萬の願なきといへどもかなひぬまことは、すなはち神なるが故なりと、人毎にいふ事なれど、誠しく心得ぬる人は稀なり、たゞ他の非をやみて、いまだ快氣せぬ人のみぞ、世に、あまたなりける、

「馬はよく、人に馴るゝといへども、人は、馬に馴るゝべからず、もし馬に馴るゝ時は、馬却て、人に馴れずといへり、されば、馴るゝ事と馴れざる事とは、物によりて、善惡あるものなり、また、晴るゝ事と曇る事とは、うらうへの事なれども、時として、ひとつに賞する事あり、例へば、秋の月には、晴るゝを賞し、春の月には、曇るを賞するが如し、これ物の、時によりてかはればなり、人情の時によりて移ふにはあらず、されば、晴るゝとも、喜ぶべきにはあらず、曇るゝとも、嘆くべきにはあらずといふとは、

異事なるを思ふべし、

第三十七 假字の清濁を嚴にすべし

國文に、志あらん人の、假字遣を正しくすべきはいふも更なれど、更にいはまほしきは、清濁の假字遣なり、清音とは、その意いたく異にて、外國にては、字形さへもかはれりといふなるに、本邦にては、唯だ、文字の右肩に、ゝ點を添ふると添へぬとにて、清濁をわから來りし故に、その事の餘りに、簡便なるにすぎて、時としては、上の字に點すべきものを、下の字に點して、清濁を誤りたるもあり、または、全く、ゝ點を點すを忘れて、濁音に讀ますべきものをも、清音に讀まするもあり、或は、濁點は、字形の美を失ふとして、故さらに點さぬもあり、殊に、歌人は、この最後の説の爲か、または、他に、その説あるが爲か、兎角に濁點を嫌ひて、短冊にも、色紙にも、懷紙にも、詠草にも、すべて、清音にのみ書きならひて、稀に、濁點をさす人あれば、歌はおきて、まづ、その書式のかはれるを笑ふ、むかし、余が知人に、後藤利哉といふ人ありて、歌人の、清濁をないがしろにするを嘆きて、自らが書く短冊などには、萬葉假字より、濁音の文字をとりて、それを草體にして、假字にまじへて書きし事ありしに、それすら、異やうなりとて、その土地

の歌人達に憎まれし事あり、されば、今日、學校にては、清濁を正しくすべしと教ふる人も、短冊を書くときは、濁點を避けざるべからず、濁點を避くれば、自らおきて、自ら破る事となり、濁點を避けざれば、書式もしらぬ痴れものと笑はる、余が三十一文字の歌をよまぬも、また短冊などを書かぬもひとつには、この爲なり、されば、今日、國語上の清濁のみだれば、種々の原因もあるべしといへども、歌人の清濁を區別せぬも、必ずその一原因となり居るべし、例へば、清濁區別なき書式にて、すゝと書けば、煤か鈴かスズと惑ひ、すゝきと書けば、薄か鱸かスベシと惑ひ、まつと書けば、松か先かマツと惑ひ、まどと書けば、的か窓かマドと惑ふべきに、これらは、猶、その前後の語勢にてもしらるべけれど、時代の古今によりて、自然に出來たる清濁は、到頭、區別しがたきに至るべし、例へば、雨などにひたぬるゝを今は、そぼづといへども、古は、そぼづといひ、また、鳥の嘴にて、物をつきくするなどを、古は、つゝしるツツシといへりしを、後には、つゝじるツツジといふ類を、清濁區別なしに、そほづソホヅつゝしるツツシと書くときは、濁音は、ほに來るか、つに來るか、しに來るかもしられねば、語調をあらはすこと出來ずして、時代文は、全く出來ぬ事となるべし、鵲ツクシといふ鳥は、常には、さゝきササキときを、濁音に呼べども、ふるくは、さゝきと

さを濁音に呼びたり、陵も、常には、みさゝぎと呼べども、ふるくは、みさゝきと呼びたりともいへば、清濁は、古今を區別するにも、要用なる事あれば、歌人達の如く、しどけなく書きなすべきにはあらず、河豚といふ魚は、袋の如くふくるればこそ、ふくとも呼びなしけん、に、東國にては、ふぐとくを、濁音に呼ぶゆゑに、語の意も、しられずなり、むづかしといふは、物のむさくとしたるをいふ語にて、もとむづかるといふ語と同語なれば、づは、清音に呼ぶべきを、之も、東國にては、むづかしと、づを濁音に呼べり、これ等は方言なれば、さてあるべきやうなれど、方言といふ中にも、清濁を誤りたるは、上古にはすくなくして、後世にくだるにつけて多くなりもて來たるは、余は例の濁清みだりなる假字遣より起れりと思へり、さ思ふ由は、今日清濁を區別せぬ事は、文字の上のみにあらず、口語の上にも、きはめてみだりなる事あり、例へば、學校などにて、濁音は、清音の字に、ゝ點を添ふるなりと教ふる故に、學齡童子は、みな然か心得て、ゝ點なき文字は、清音に讀みならふ事なるに、伊呂波歌のをはりのす、文字のみは常に濁音にすと教ふる故に、童子は、す、文字にかぎりて、すともすとも讀むものと心得たる故にや、先年、或童子の、小學讀本をよむを聞きしに、こゝかしこ不思議に讀み

なしたるを聞きし事ありて、或人に語りしに、文運隆盛などいふは、今日の口癖にて、實際は決して然らず、清濁を正すなどの事は、今より百年の後はしらす、とても、我々の生涯に出来る事にはあらず、近くは、官報をよみ、一字も濁字はなきにあらずや、また諸官省の呼出諸學校の廣告などにも、出頭す。へし。願出。へし。とありて、べしとはなきにあらずや、されば、清濁の自由讀は、伊呂波歌のをはりのすのみに、はかぎらず、へにも、ほにもあるべし、余は、夫よりも不思議に思ふは、論說にもあれ、注釋にもあれ、例へば、語格、文法などを説きたる文に、語格、文法の違へるものある事なり、それよりも、例猶をかしきは、例へば、論は、新體文を作らんといふ論にて、その文は、その論者の嫌へりといふ古體の文を用ふる類なり、此等は、自家撞着などいふよりも、頭かくして尻かくさぬ者といふべし、自かまづ書く事あたはずして、人に書けとす、むるは、逃げながら、進めの號令をかくるに同じ、豈すすむ者あらんやといひて、抱腹絶倒して、余が眞面目なる清濁論を、大笑中に打消したり、さりながら、余は、返すくも清濁は、正しくせまほしく思ふなり、この頃、ふと、閑窓瑣談といふ物をみしに、清音の一字を、濁音にして、三十一字の歌の意を顛倒せしめたる一話をのせたり、その話に、雅言の功

と題して、一字一言にても、心を用ふる時は、千萬無量の思ひをのべて、ゆかしき事もあるぞかし、寶永年中、板鼻檢校とかや、さる諸侯の御供して、信濃國、姥捨山の麓にて名におひたる月の名所なれば、彼君は、檢校を、近くめされて、檢校は、この所の月を、いかに思ふらんと宣ひければ、

我が心なぐさめかねつ、更科や好捨山にてる月をみて、古歌のみでと詠みして、の字をにぎりて、みでと詠むばかりにて、盲人の情をのべたるは、當意即妙の答にて、いともゆかしき才智といふべしと、いへり、この歌も例の清濁區別なしの式にて、かゝばいかゝあらん、大抵の人は、古歌と思ひて、答歌にはうけとるまじ、されば、返すくも濁は、正しく書きならふべき事なりかし